『新編 日本のフェミニズム』全 12 巻完結記念公開シンポジウム

2011 年 1 月 30 日（日）13:30 18:00
東京大学文学部 1 大教室（法文 2 号館 2 階）

●開会挨拶　「編者の立場から」　十時由紀子（岩波書店）

こんにちは．ようこそおいでくださいました．時間は定刻を２分ほど過ぎました．まだ受け付け中の方もおられますが，かなり中身が詰まったイベントですので，そろそろ始めさせていただきます．

私は，岩波書店でこの今日の会のタイトルになっております『日本のフェミニズム』，古い刊で全８巻，新しい刊で全 12 巻のシリーズを，担当させていただきました編集者の十時由紀子と申します．僭越ながら全体の司会進行を任されましたので，どうぞよろしくお願いします．（拍手）

私に与えられた時間は５分間で，時間管理の任務も担っているので，自分は５分以内にしっかりおさめたいと思います．

まず，今日お手元に配った配布物の確認をさせてください．クリアファイルの中に，シリーズのデザインをそのまま流用した表紙のついた冊子が一つ，それが今日のレジュメですが，そのほかに分厚い上野先生の報告用の資料が一とじありまして，そのほかに本日，皆様にお答えいただきたいアンケートが１枚，それから岩波書店から新しく始まるシリーズ，『ジェンダー社会科学の可能性』というシリーズの予告チラシも入っています．それからもう１枚，今回のシリーズが始まる前につくった内容紹介の見本が余っていましたので，今回皆様にもお配りしています．こういうコンセプトで始めましたという挨拶もこの中には入っています．これで全部ですが，もし何か足りない方がおられましたら，まだ受付に多少余っていますので，お申しつけくだされば お渡しできるかと思います．

では早速，『日本のフェミニズム』全 12 巻完結記念公開シンポジウムを始めさせていただきます．

本日のシンポジウムは上野先生が中心となって立ち上げた実行委員会が主催者ですが，共催が東京大学ジェンダーコロキアムとＮＰＯ法人ウィメンズ・アクション・ネットワーク，それから後援が，東北大学グローバルＣＯＥプログラムの「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」，そして東京大学社会科学研究所連携拠点と岩波書店です．それから本日は，たくさんのボランティアの方々や書籍販売で東京大学の生協書籍部の方にもご協力をいただいています．たくさんの方のご協力で進めさせていただきます．

皆様にも何点かご協力いただきたいことがありますので，挨拶とあわせて今アナウンスしたいと思います．まず今，先ほども申し上げましたが座席の数が限られていますので，疲れてきた方には譲ってくださるなど譲り合って，あるいはぜひ立たないで，階段にでもどこにでもお座りください．おしりがちょっと汚れるかもしれませんが，何か下に敷くと汚れないかと思いますので，ご協力をお願いします．

それから，お手元に配ったものの中には細かいスケジュールや今日の時間割りは書いていませんが，プログラムは資料表紙に記した順番に進め，会場舞台上にはぺらっとめくる

もので演題や発言者の名前をお示ししますので大体おわかりいただけると思います．非常に短い時間の中で進めさせていただきます．

第１部として，この後に井上輝子先生に完結のご挨拶と，それから上野千鶴子先生に「アンソロジーの政治」ということ，それから第２部に，40 代，30 代，20 代からのこのシリーズを読むということ，それから第３部にさまざまなテーマでのコメントをそれぞれ 10 分ずついただくという具合に，非常に小刻みです．その後に休憩を挟み，第 4 部では各編者からのコメントと，それを受けての会場との討論があります．

また，今回は質問用紙をお配りしていませんので，休憩時間その他にご質問を急いでまとめていただいて，挙手にて，さらにはご自分のお名前をおっしゃっていただく形で，責任を持った発言で実りのある会話の場にしていきたいと思いますので，ご協力をよろしくお願いいたします．

残すところ１分なので簡単に申し上げます．今回は撮影と録音のスタッフが入っています．録音してそれを後ほど文字に起こすことも企画していますが，これをご了解ください．それから，写真撮影は皆様のお顔がばっちりわかるような形ではしませんので，これもどうかご了承いただきたいと思います．ご協力お願いいたします．

残り 30 秒ぐらいなので，私が言いたいことを，この場をかりて皆さんに一言．このアンソロジーは，いろいろな出版社から出された，あるいはチラシやミニコミという媒体で発表されたものを少しずつ，おいしいところをつまんでつくらせていただいたシリーズです．もともとの執筆者の方はもちろん，もともとの版元の方々のご協力がなければ到底成立しない，重みのある，また実のあるシリーズでした．読者の方々への感謝も含めまして，この場をかりて皆さんにお礼を申し上げたいと思います．今後もよろしくお願いします．

それでは第１部に入っていきます．井上輝子先生，お願いします．（拍手）

◆第１部

●完結にあたって：『日本のフェミニズム』を手渡すために　編者を代表して

井上輝子（和光大学）

さまざまな運動と経験を一つのテーブルに

こんにちは．ご紹介いただきました井上です．「編者を代表して」と書いてありますが，私は代表というよりは，1994 年から 1995 年にかけての『日本のフェミニズム』旧版以来の企画にもかかわってきた年長者として，トップバッターをお引き受けしました．

今日の会を始めるに当たって，まずこのシリーズが完結したこと，というよりもこれだけ日本のフェミニズムの蓄積があるということを皆さんと一緒に喜びたいと思います．

今に続く日本のフェミニズムは，1970 年代初頭のウーマン・リブに始まりますが，その後現在に至るまでの 40 年間に，多くの運動と研究が積み重ねられてきました．今回のシリーズでは約 250 点の作品を収録させていただいていますが，言うまでもなくその何倍もの

収録できなかった作品があります．70 年代に私たちがウーマン・リブの運動にかかわり，また女性学を始めたころにはもちろん期待はしましたけれども，これほどの運動と研究が進められるとは予想ができませんでした．今これだけの運動の広がりと膨大な研究の蓄積ができたことを感慨深く思います．

ところで，女性の経験と抑圧の多くは，実は深いところで互いにつながり合っています．例えば夫は仕事で妻は家事・育児という夫婦間の役割分担は，ドメスティック・バイオレンス発生の一因でもあります．またそれは労働市場での男女の賃金格差や世帯単位の税制や社会保障制度，また学校教育の場での学習内容，進路指導，そしてマスメディアで描かれる男女像等々とも連動しています．

今回のシリーズはさまざまな分野で進められてきた運動と研究を一つのテーブルにのせて一覧することを試みました．そのことによって，女性を取り巻く問題の連鎖を明らかにできると考えたからです．このシリーズを読まれるときには，どれか一つの巻だけではなくて，いくつかの巻を一緒に読んでみていただきたいと思います．複数の巻を並べて読み比べることで，発見することもまた多いと思われます．

さてそれでは，なぜ「日本のフェミニズム」というシリーズを企画したのかということからお話ししたいと思います．

『日本のフェミニズム』刊行の趣旨

まずフェミニズムということですが，これは何よりも私たちが女性学を中立性と客観性を標榜する既存の学問とは違うフェミニズムの学問版ととらえていることが大きな理由です．第二波フェミニズムは近代社会を成り立たせている性別分業その他の経済，政治の仕組みの変革を目指す社会運動ですが，同時に近代の男性中心の文化そのものを批判して，フェミニズムアート，フェミニスト映画，フェミニズム批評等々を生み出してきました．女性学はそうしたフェミニズム文化運動の一つであります．このような視点からフェミニズムの運動と研究を一貫的にとらえることがこのシリーズの第一の特徴と言えます．

フェミニズムという言葉をめぐっては，70 年代以来さまざまな議論があり，強い思い入れを持っている方もいれば，他方で非常に拒否反応を示す方もいらっしゃると思います．私たちはリブでも，男女平等思想でも，また男女共同参画でもなく，それらを含む広い意味，すなわち「女性差別ないし，性別に基づく抑圧の撤廃を目指す思想と運動」という程度の意味でフェミニズムという言葉を採用しました．私たちが考えるフェミニズムの射程は何かということは，具体的にはこのシリーズ全体を読んで判断していただくしかありませんが，今日のシンポジウムの第３部，第４部であらためて議論させていただきたいと思います．

なぜ「日本の」なのか

次に，なぜ「日本の」なのかということです．それは私たちが日本に地生えの運動と研

究があると確信しているからにほかなりません．70 年代以来，ウーマン・リブはアメリカからやってきたんだとか，女性学は欧米の研究を日本に適用しただけだといった批判が，しばしば投げつけられてきました．けれども，皆さんもご存じのように欧米の借り物でも輸入品でもない，日本社会に根差した独自の運動と学問が積み重ねられてきています．

では「日本の」というときの収録範囲はどこまでかといえば，「増補新版の編集にあたって」にありますように，「日本における，または日本にかかわる多様な女性や男性の経験を自分の言葉で語ったメッセージ」ということになります．その際，メッセージの発信者が日本国籍を持つか否かとか，あるいは日本に住んでいるか否かということを問わなかったことは言うまでもありませんが，私たちの力量の問題もあって，日本語で書かれたものという限定をつけたことも事実です．この点についても第３部，第４部で議論があるかと思います．

15 年後の今，なぜ新編か

旧版といいますか前に出した版は 1994 年から 1995 年にかけて刊行しましたが，それから 15 年後の今，なぜ新編を刊行したかといえば，その理由は言うまでもなく，この 15 年の間に日本のフェミニズムと女性学が新たな展開を遂げたからです．

例えば北京会議をきっかけにしてジェンダーという言葉が行政用語としても，また教育や運動の中でも浸透し始めました．また日本の女性たちにグローバルな問題関心が共有されるようになったとも思います．さらに男女共同参画社会基本法やＤＶ防止法の成立等によって，フェミニズムに基づく社会変革に向けて，法的な整備も始まりました．その直後にバックラッシュの波が押し寄せますが，フェミニズムまた女性学は結束してこれに対抗し，それなりの進化を遂げたと思います．

一方では 90 年代初頭に，伊藤公雄さんたちによって男性学が始められ，またメンズリブ，メンズセンターも開設されます．また同じころに，さまざまなタイプのセクシュアル・マイノリティの人たちの運動が開始されるようになりましたし，クィア・スタディーズも誕生しています．

こうしたジェンダー研究の広がりと，さらに構築主義的なジェンダー概念の浸透などによって，女性学もセカンドステージに入っていきます．性別二元制批判は女性学の重要な関心事になっています．また貧困の女性化，アンペイドワーク，ドメスティック・バイオレンスなど，90 年代以降，新たに議題化してきた諸問題の解決に向けて，女性学の研究は蓄積されてきました．こうしたフェミニズム女性学の新たな展開を加えて紹介する必要があるということで，増補新版を編んだ次第です．

バトンを渡すために

さて最後に，若い世代の方々にバトンを手渡すために，フェミニズムの運動と研究が，今も今後ますます必要であることを，私は改めて強調したいと思います．なぜなら，問題

がまだ山積しています．レジュメにとりあえず列挙しましたが，例えば　貧困の女性化，雇用の場における性差別，アンペイドワーク，女性に対する暴力，性と生殖の自己決定権の未確立，性差別的なポルノグラフィの氾濫，メディアによるジェンダーの再生産，「男稼ぎ主」型性別分業を前提とする企業システムや社会保　障制度･税制等々が挙げられます．こうした未解決の問題が山積しており，これらの問題を解決するための運動と研究がぜひ必要です．また，「女性」としてのアイデンティティーを持つ人たちが多数存在している上に，他者から社会から「女性」として扱われ，「女性」として振る舞うことを期待される人たちもたくさんいるという現実があります．こうした「女性」を自認する人たち，あるいは女性扱いされる人たちのエンパワーメントがまだまだ必要だと思います．

私たちが格闘した時代と現代では，抱える問題も，解決の手法も当然ながら変化しているはずです．若い世代の方々は，自分たち自身の問題意識に基づいて新たな活動を展開していただきたいと思います．若い皆さんが，私たちの世代の蓄積であるこのシリーズ「日本のフェミニズム」を，財産目録として活用したり，批判したり，発展させていただければ幸いです．（拍手）

十時　続きまして上野千鶴子先生にお願いしたいと思います．

私はタイムキーパーで合図を鳴らしたりしますのでどうかお許しください．よろしくお願いします．

●アンソロジーの政治　上野千鶴子（東京大学）

準備段階での反応

編者の一人，上野です．

アンソロジーとは，既に刊行されたものをそこから選んで再録するというものです．当然，何を採用し何を採用しないかを選択することになります．その場合に，いったいどんな媒体から，どの範囲のテキストを集め，何年から何年までの期間を選ぶかという判断をやおこなわなければなりません．

それに，著作権者がわからないものは採用できず，著作権者の許諾を得なければなりません．ここに載っているものは許諾を得たものばかりですが，選択したテキストの著作権者のうち，お断りをされたのは２例にすぎませんでした．その一人は，自分の文章を抄録の形で切られるのは困るという方と，もう一人は男性の著者で，女性の編者によって自分の論文が判定を受けることは望ましくないと考えたお２人だけでした．

「ええっ，こういうところに収録されるって博物館入りすることですか」という反応もありましたし，版元についても「岩波書店なんていう，そんな権威主義の出版社から出すんですか」という抵抗を示した著者もありましたが，応諾していただきました．とはいえ，この本を出すに当たって，こんなにもうからない本を出すために応援をしてくださったの

は岩波のおじさん編集者たちだったということは証言しておきたいと思います．編者，著者，版元，さまざまな方たちの協力のおかげで，結果としてこういうアンソロジーが生まれました．

テキスト選びの政治性

配布した【資料】の通し番号１ページに「日本のフェミニズム　編集にあたって」という 1994―95 年刊の旧版前書きがあります．ここには「日本のフェミニズムは欧米の借り物でも輸入品でもありません」「固有の経験を自分たちのことばで表現し，フェミニズムの思想的達成に貢献してきたと言えます」と書いてあります．

今回の増補新版においては若干ニュアンスが変わりました．「日本におけるまたは日本に関わる多様な女性や男性の経験を，自分のことばで語ったメッセージ」「日本国籍を持つ女性や持たない女性，女性や男性，そしてそうした性別の分類を拒否する人々の関与によって築きあげられた」と．この中にも 15 年間の違いを見てとっていただけると思います．

歴史をつくるということは何を選択的に記憶し，何を選択的に忘却するかということになります．これはもちろん権力の行使です．したがって，何をフェミニズムのテキストとして認定するかをめぐって，編者９人は権力を行使したと認めざるをえません．そこには，このテキストをフェミニズムの遺産として認定するという正統化の政治，これこそは残ってほしいという正典化の政治がありました．

『フェミニズム・コレクション』1993-94

アンソロジーとは何がフェミニズムであるかをめぐる定義の政治でもありますが，このような権力を行使したアンソロジーはほかにも複数あります．この『日本のフェミニズム』の刊行に先立って，勁草書房から『フェミニズム・コレクション』全３巻が出ています．皆さん方のお手元の資料に目次をつけておきました【資料】．

『日本のフェミニズム』の編者はほぼ女性学第１世代によって担われましたけれども，岩波版にわずかに先立った勁草版の『フェミニズム・コレクション』は，もっと若い世代の編者で，フェミニズムのレイトカマーであり，しかも男性も編者に含まれるという非常に性格の違ったものでした．勁草版の編者は，「現在 30 歳前後で，リブを自分の問題としては体験しなかった世代に属している」と自認しています．【資料】に勁草版の「はじめに」を付けておきましたので，それを見ていただくと違いがわかると思います．

私たち岩波版の編者は，先行して出た勁草版に敬意を表して，重複を避けるために，勁草版に収録したテキストは岩波版には採用しないという淑女協定をつくりました．したがって，形相版に収録された重要な文献は，岩波版の旧版に採録されないという困ったことが起きました．したがって，どれか一つだけを読むと全体を網羅することはできないということになりますが，両方そろえてフェミニズムのアンソロジーと考えてほしいと期待しました．にもかかわらず，その後，勁草版は絶版になってしまいました．新編を出した理

由の一つに，絶版になってしまった勁草版から，欠かすことのできない重要なテキストをもう一度採録するということで，決定版をつくりたいという意図があったことは，お伝えしておきたいと思います.

『資料 日本ウーマン・リブ史』1992-95

このような違いがあってほぼ同時期にふたつのアンソロジーが生まれたわけですが，もう一つ，先行する資料として『資料 日本ウーマン・リブ史』があります．これが既に出ていましたから，『フェミニズム・コレクション』はこの中から採用しないという方針をとっています．逆に，私たちが『日本のフェミニズム』を編むに当たって，『資料 日本ウーマン・リブ史』全３巻がなければ，このアンソロジーはできなかったということははっきりお伝えしておきたいと思います.

【資料】に『資料 日本ウーマン・リブ史』の「はじめに」のマニフェストを載せておきました．大変感動的な文章ですので一部をご紹介します.

「これは 70 年代のリブの女たちから，90 年代にリブを生きようとする女たちへの贈物である．（中略）女たちからとどいた，ダンボール箱いっぱいの女たちへのよびかけ，いくたびかの引っ越しをくぐりぬけ，押し入れの一角をいつも占めていた．黄色く変色してボロ紙同然になっても，なお捨てられなかったのは，それがわたし自身であったから」「この先もリブが「資料」としてではなく，あなたの生となって生きのびることができたら，どんなにすばらしいことか．リブは知識ではなく生となってこそ，真に輝くのだから.」

『資料 日本ウーマン・リブ史』は３人のリブ世代の編者の執念から生まれました．この陰には，抄録しか引き受けなかった商業出版社に代わって，全編採録という前代未聞の無謀な企画に応じた版元があったことを，ここで皆さんにお伝えしておきたいと思います．それは日本で最初の女の書店，松香堂ウィメンズ・ブックストアでした．この『資料 日本ウーマン・リブ史』がすでにリブのテキストの定本としてあったからこそ，『日本のフェミニズム』を編むということが，現実性を持って浮かび上がってきました.

『日本婦人問題資料集成』1972-81

ところで，リブとほぼ同時代に私たちの大先輩，第二派フェミニズムに先立つ日本の婦人運動の輝かしいリーダーたち，市川房枝，丸岡秀子のような方たちが編者となっておつくりになった『日本婦人問題資料集成』（全 10 巻，ドメス出版）が 10 年がかりで出ています.

【資料】の目次を見てください．これを見ると，アンソロジーがいかに権力の行使であるかということがおわかりいただけると思います.「政治」の巻を市川房枝さんが編集しておられます．目次を見たところ，リブに関するテキストはほぼ皆無です．あるのは国際婦人年に関するテキストだけで，もしこの資料集をもって日本の婦人運動史を書こうとするならば，70 年代には日本にはリブがなかったと結論する研究者がいても不思議はないとい

うことになります．この資料集が 1981 年までカバーしていることを考えれば，これは市川房枝さんがリブを政治とは認めなかったことを想定させます．

リブについての資料が入っているのは，丸岡秀子さんが編集した「思潮」下巻（戦後編）です．田中美津さん，辺輝子さん（井上輝子さんのペンネームです）のテキストが採録されています．これが意味するのは，リブを思想としては認知するが政治としては認めないということになるでしょうか．

このように複数のアンソロジーの間にはこれだけの違いがあります．それぞれに編集ポリシー，すなわち政治的な信条がかかわっているということがおわかりいただけるかと思います．

遺産相続者たち

では，私たちは『日本のフェミニズム』をなぜつくったのでしょうか．もちろん，フェミニズムのメッセージを手渡すためです．手渡したいと思った者たちがいても，受け取ってくれる者が現われなければ，メッセージは宙に浮いてしまいます．だれにフェミニズムのメッセージを手渡すかということを私たちがいかに意図しても，だれが受け取ってくれるかということは別に考えなければなりません．

読者は受け取るメッセージを，つねにみずから能動的に選ぶものです．読者には能動性がありますから，たとえリブやフェミニズムについてどんなに否定的なテキストからでも，そこから対抗的なメッセージを読み取る人もいます．バックラッシュ派のテキストからさえ，「おお，こんなに頑張っている女がいるのか」ということを読み取る読者もいるでしょう．このようにテキストを「対抗的に読む」読者もいます．『日本のフェミニズム』の編者の平均年齢は 50 代を超えています．それを手渡したい次の世代の若い読者たちはいかに読んだかを，第 2 部で 40 代，30 代，20 代の読者の方たちにご発言いただきたいと思います．

改訂版は可能か

旧版と新編の間には 15 年の時差があります．15 年間というのは，社会環境もフェミニズムの蓄積も，ともに大きく変えるに十分なだけの長い時間でした．それなら，これから先 15 年後にも，改訂新版は出るだろかと考えてみましょう．改訂新版が出るために，現在の編集方針を維持することができるだろうかという問いが立ちます．15 年後に，もしご自身が改訂新版の編者になると想定したらという前提で考えてみてほしいと，私は若い人たちに問いを投げました．第 3 部で話していただく方たちはいずれも，これから 15 年後に改訂新編『日本のフェミニズム』の編者になる蓋然性の高い，優秀な研究者たちです．

その方たちに検討していただきたい編集方針は，３つあります．第 1 に，私たちはテキストを日本語によって発信されたメッセージに限定しました．「日本人による」とは限定しませんでしたが，外国人で日本語で情報を発信する人もいれば，日本人でも外国語で情報発信する人もいます．たとえ外国語で発信しても日本のフェミニズムに大きな思想的貢献

をするテキストもあります．これからグローバリゼーションの波が怒濤のごとく訪れ，英語化が進む今日において，15 年後に「日本語によるテキスト」などという原則，これを言語ナショナリズムといいますが，このようなポリシーが維持できるかどうかは，極めて疑わしいと言わなければなりません．

既に『グローバリゼーション』の巻には１点，最初から英語で書かれたテキストを採録するという例外が生まれています．それに英語だけでいいのか，韓国語や中国語など，他言語は考えなくていいのかということも議論しなければなりません．

性別二元制と当事者主義

第 2 に私たちは，徹底した当事者主義をとりました．女性について女性が語るテキストに限定したのは，これこそ女性学を「女の，女による，女のための学問」と定義した井上輝子さんの定義の政治をそのとおりに遂行したわけです．そうなると，女が書いたすぐれた男性論は排除されますし，逆に男性の書いたすぐれた女性学のテキストもそこから排除されることになります．また男性学の巻は男性が書いた男性学のみに限定されました．このような排除と限定のポリシーを維持することは可能でしょうか．

その結果起きる問題のなかに，ジェンダー・アイデンティティーをはっきり表明している著者はともかく，性別二元制を揺るがすセクシュアル・マイノリティを女性学・男性学のいずれの当事者とみなせばいいのか，その苦慮の痕跡が新編には残っています．これには解は見つかっていません．これから先には，こうした問題に果敢に取り組んでいただく必要が出てくるでしょう．

ネット時代のテキスト選び

第３に，私たちは既に刊行されたものの再録というアンソロジーの趣旨に沿って，テキストの媒体を印刷メディアに限りました．とはいえ，テキストの範囲を拡大し，チラシ，ミニコミにまで目配りを広げました．したがって，このアンソロジーには多様なテキストが採録されていることは自信を持って申し上げられますが，もしチラシやミニコミにまで目配りをするつもりがあるならば，このネット時代にブログや Twitter にまで目配りしなくてよいのかという問いが当然のように出てくるでしょう．

ですが，こんなに膨大に流通しているネット上の情報をすべてフォローすることはできるのか，記録にとどめておくことができるのか，テキスト集合の範囲をどうやったら決めることができるのか，一体だれがそれを選別できるのか，ネット上に著作権はあるのか，匿名性の高いネットメディアで，著作権者の許諾をどうやってとればいいのか・・・電子メディア上には，これまで想定しなかったさまざまの問題が登場しつつあります．

史上最後のアンソロジー？

今回のシンポジウムもウィメンズ・アクション・ネットワークというウェブサイトを事

業化したNPOが共催団体となりました．このシンポの記録は，文字情報としていずれウェブ上にアップされる予定です．参加者のみなさんの合意さえあれば，今日のシンポをそのままネット中継することも技術的には可能です．このようなネット時代に，15年後，いかなる編集方針のもとにアンソロジーを編むことができるのでしょうか．

15年後には，いかなるポリシーを立てたとしても，もはやアンソロジーを編むに足るだけのテキストの範囲を確定することそのものが，不可能になるかもしれません．テキスト集合を確定できないかぎり，アンソロジーはできません．印刷メディアにテキストを限定したアンソロジーは，これが歴史上最後になるかもしれません．そう，私は本気で危惧しています．

そういう変化の激しい時代に私たちが直面しているということを念頭に置いて，これから先のシンポジウムにお立ち会いいただければと思います．このメッセージを受け継ぐのは皆様方であるとお伝えして，私の話を終わります．ありがとうございました．（拍手）

十時　ありがとうございました．いま上野先生から直接第２部，第３部の内容紹介もしていただきましたので，そのまま入っていきたいと思います．

これからご登壇なさる方々，それからこのシリーズの編者の方々のプロフィールは，一々ご紹介しておれませんが，お手元の資料についていますので，ごらんください．

ではまず40代からということで，岡野八代先生，お願いします．

◆第２部『日本のフェミニズム』を若い世代が読む

●40代が読む　岡野八代（同志社大学）

自分自身を振り返りつつ

皆さん，こんにちは．私は気合いを入れなくていいかなと思っているので，座ってお話しします．

私のレジュメは４ページにあります．話の中心で触れられるかわかりませんが，ちょうど上野さんがお配りくださった資料にすべての巻の目次があるので，その第２巻『フェミニズム理論』のところをごらんいただきながら聞いていただきたいと思います．

先ほど井上輝子さんのほうからは，問題が今も山積していて，若い人たち独自の活動の展開をぜひというお話がありました．上野さんから配られた『資料 日本ウーマン・リブ史』「はじめに」の中に，「1970年代という激しい，変革の時に，歴史の大変動を生きた女たちの「自己記録」である」という一節があります【資料】．その言葉を受け取りながら，上野さんは解答でこの『新編 日本のフェミニズム』が最後だと言われて，私はどうしようかと，本当にどうやって受け取ったらいいのか重い気がしますが，自分自身を少し振り返りながら，70年代とは違う見方を提示できたらと思います．

1990 年を境とする変動

私は 40 代なので，学部３年生のゼミで政治思想史という学問を選んだときがちょうど 1989 年，ベルリンの壁崩壊の年でした．研究者になろうというか研究の道に進んだのが 1991 年，ちょうど冷戦終焉で，その後私にとって一番大きな出来事は，やはり日本軍慰安婦の金学順（キム・ハクスン）さんが 1991 年に告発をし，その後 2000 年に国際戦犯法廷という形になっていったこと．振り返ってみると，1990 年を境に私の中で何かが大きく変わったし，恐らく時代も変わりました．

私は新編第２巻の増補編Ⅱ「リベラリズムとフェミニズム」のところに収録していただいていますが，亀裂のような 90 年代のある種の大きな大変革が，世界的にも思想的にも起こったし，フェミニズム理論もその大きな波を受けたのではないかと，今回自分史を振り返りながら強く感じました．

なぜアーレントを研究したか

私の最初の論文は，政治思想史でアーレントいう研究者を取り上げたものでした．「アレント　公的領域の再興」（『西洋政治思想史Ⅱ』新評論，1995 年）です．理由としては，政治思想史という学問をやっていると，女性はハンナ・アーレントとシモーヌ・ヴェイユぐらいが授業に出てきただけで，それ以外は全く大学の教員にも１人も女性がいませんでしたし，自分の中ではフェミニズムとは関係なく，アーレントしか選べなかったというのがあります．

しかしながらタイトルを見ていただければわかるように，まだ修士を出たばかりのときに出した論文ですので，アーレントが書こうとしていた公的領域は，もしかするとフェミニスト的にも女性たちが公的領域にどうやって参入していくかというような点で考えていたわけです．

次の論文「アレントとフェミニズム――「闘争の場」としての政治」は，『思想』で出した論文です（872 号，1997 年）．この間，私は初めてカナダに留学しますが，日本の大学でフェミニズムが少なくとも正規の授業では全くないときに，カナダではアーレント研究者のほとんどがやはり女性で，そしてフェミニズムだったということに大きな衝撃，刺激を受けました．アーレントはボーヴォワールと同世代ですが，特にボーヴォワールを非常に強く批判しましたので，日本で男性の思想家の多くがアーレントを好きなのは，アーレントはフェミニスト嫌いということで，日本の男性研究者に非常に好印象を与えていたせいかもしれません．その中で，日本ではほとんど注目されてこなかった，アーレントとフェミニストの接点を自分なりに考えてみたいと思って書きました．

フェミニストと友達になれるかも

ですが，ここでは何か自分の驚きの告白をしなければいけないというので申しますが，

カナダに留学している間に書いたこの論文，これを書こうと思ったきっかけは，「このまま日本で政治思想史学会に戻ったら，私は女１人じゃん」ということで，当時男性の友達しかいなくて，研究仲間がだれもいないところで，フェミニズムとつくものを書いたらフェミニストと友達になれるかもしれないという無謀な，今思うと恐ろしいような，フェミニスト業界をほとんど知らないまま，そう思ってフェミニズムというタイトルをつけて『思想』に投稿したというわけです.

その縁があって，自分のもくろみはある意味非常に成功しました．というのは，ここでこうして皆さんとお話できることにもなりました．プラス，先ほど上野さんからも説明していただいたウィメンズ・アクション・ネットワーク（ＷＡＮ）というサイトの運営に私もかかわっていまして，そこで『日本のフェミニズム』第２巻，江原さん編集の『フェミニズム理論』のちょっとしたエッセイを書いたりもしています（http://wan.or.jp/book/?p=269）.

歴史の終焉とリベラリズム

実は 90 年代，時代が非常に変化して，特にこの『フェミニズム理論』の巻を見ていただければわかりますが，改訂する以前の旧版では，やはり 70 年代，80 年代の女性たちの活動から紡がれてきた言葉が，理論としてどう既存の理論と向き合うかということで非常な格闘が見えます.

リベラリズムのフェミニズムになると，特に私のところですが，身体性もなければ，女性の運動のかけらもないような，何といいますか非常に抽象化された議論になっていて，自分が生きてきたはずの 90 年代，特にやはりマルクス主義，現実としては社会構想をする際のある種の大きな理念が一つなくなったというのは，私の中でも非常に大きかった．私はバブルのときに大学にいて，それまではニューアカデミズムやポストモダンの時代だったので，政治思想史も割と人気でした．ところが東西冷戦が終わった後，そしてバブルがはじけた途端，政治思想史に人が来なくなって，私の中では思想は一回死んでいます.

ところが，その後何が起こったのか．リベラリズムが唯一残った．フランシス・フクヤマの有名な本ですが，歴史が終焉して，その後リベラリズムがすべて世界を制覇するという思想的な地図になるわけです．ところがその後，第２巻の増補編Ｉ「モダンとポストモダン」のところを見ていただければいいと思いますが，思想は死んだけれども，もちろんフェミニズム理論としては非常に大きな蓄積がどんどん蓄積はされていくわけです.

リベラリズムとの格闘

ところが江原さんが解説のところで，私もこれを重く受けとめていますが，「誤解を恐れずに言うとすれば，21 世紀初頭の今日，フェミニズム理論は，明確な方向性を見いだしにくい「停滞」の状態にあるように思う」と言われていて，これは私は非常にずきんと心にきました.

というのも，増補編に収録されている２本の野崎綾子さんと私の拙稿は 2002 年，2000 年のかなり初頭に書かれたものです．その後のリベラルの次が自分の中でもなかなか見えなくて，今リベラリズムとの格闘だけで，この後８年ぐらいずっと，その周辺をぐるぐるとめぐりめぐっているわけです．

私のＷＡＮのサイトに掲載した文章の中に，江原さんの一節を引いておきました．

「近代社会システムのもっとも中心的な特徴は，前近代社会においては，社会システムの中心的問題として，当該社会イデオロギーに連結内在化されていた，次世代の産出と養育の機能を，個人の自発性と恣意性の領域――自由の領域――においてしまったことである．しかし，この私生活領域こそが近代社会にとってのかくれた前提である以上，それは「安んじて労働者の本能」にまかせておかれはしなかった．次世代の産出と養育は何としても果たされねばならない課題であったのだから．[…]それゆえ，女性身体は，近代におけるもっとも中心的なイデオロギーの場，闘争の場となった」（江原『フェミニズムと権力作用』勁草書房，2000 年，113 頁より）．

この中で江原さんはフェミニストの問題，つまり女性の身体をめぐって，権力あるいは政治の地場がそこにこそ埋められているんだとはっきり明確に指摘されています．この問題提起は私もいまだに解けないし，この問題をめぐって恐らく今後も格闘は続くと思います．私の中の理論構築の中心にずっとある問いが，ここにあります．

江原氏の問いを受けて

この江原さんが提起された問題は，公私二元論の再検討をはじめ，まだまだやることがたくさんあって，現実にも井上輝子さんが言われたように，女性が抑圧されて差別されているという現実をどう克服するか，いまだにこれは格闘しないといけませんし，あるいは労働概念もそうです．再生産労働をとらえるかというのは，私たちの大きな問いです．それからもちろん性暴力もそうですが，女性自身たちが自分たちでどうしたら非暴力的なある種の倫理を構築していくかということなど，まさに井上輝子さんが言われたように問題は山積しています．

それではこの後は若い 30 代の世代の方に次はバトンタッチしまして，私のお話を終わらせていただきます．

十時　どうもありがとうございました．衝撃の告白も含む発表をありがとうございました．次は 30 代ということで，熱田さん，お願いします．

●30 代が読む　熱田敬子（早稲田大学）

マイナスからのスタート

よろしくお願いします．シリーズ第１巻，北原みのりさんを紹介した上野さんが，「フェ

ミ嫌いを通じてフェミに出会う」と言っているところがあります．私もまさにそうでした．1979 年生まれなので，物心がついたころには，もう第二派フェミニズムは頭の上を通り過ぎていました．だから，中学生のときに林真理子を読んで上野千鶴子を知ったというのが，私のフェミとの遭遇です．

かといって北原さんのようにフェミ嫌いの文法を読解するにはいたらなくて，私がそのときに素直に受け取ったのは，「フェミなんかになったらおしまいだ」というメッセージだったんですね．けれども，いま考えるとフェミになったらおしまいだというのは，フェミになってしまいそうな自分がいたから思ったことだというふうに思います．

「ジェンダーと教育」の巻の中では，平等が建前の学校で実は男女をすごく酢漬けされているんだということが言われていますが，女である自分を受け入れるということが，普通の子か，優等生か，セクシーな問題児のどこかに入らなければいけないということと同義であるということだと，やはり，そのどこにも入れなくて「女」というカテゴリーの前で立ちすくんでしまう人がいます．家庭の不平等というのも「性役割」の巻で指摘されていますが，やはり感じざるを得ないわけで，家庭で下位におかれる女であることがなかなか受け入れがたい，そういう状況があったと思います．

そんなときに女であることからスタートするフェミニズムというのは，マイナスの立場に自分を置くことから始める運動ではないかと感じていました．そんなのはすごく怖いなと思っていました．

きっかけは慰安婦問題

それが今こんなところにまで出てくるようになってしまいましたが，そのきっかけは何だったのかというと，岡野さんも言われていましたがやはり慰安婦問題でした．私は 1998 年に大学に入りまして，そのときにちょうど国際戦犯法廷の準備がされていました．2000 年の法廷は知ったのが遅くて行けませんでしたが，やはりすごく衝撃を受けました．名乗りを上げて，「私の被害は加害者の罪であって私の話ではない」ということを堂々と訴えている被害者の姿は，マイナスになりたくないという気持ちなんか吹っ飛ばしてしまいました．

けれども，「じゃあ慰安婦の方の支援をしよう」とはちょっとなれなかった．なれなかったのはなぜか．『グローバリゼーション』の巻に「宋さんと「支える会」の 10 年」が収録されています．私は，この梁澄子さんの文章の率直さがすごいと思うのですが，その中で，宋さんが梁さんたちに「裁判を支えるかどうかというのは，支援者のおまえたち自身の問題だ」とおっしゃっているんです．これは本当のことで，支援というのは誰かのためにしてあげるというような気持ちではできないことだと思うんです．ですから，20 歳の私には慰安婦問題というのは大き過ぎて，半端な気持ちで関わっては，感情的にナイーブにのみ込まれてしまうだけなのではないかという恐怖感がありました．被害者の方には申しわけないけれども，まず，なぜ自分は元慰安婦の方たちにすごく関心を持ったのか，自分の問

題は何なのかということを考えなくては，支援をする足場ができないんじゃないかと感じたんです．

そのころ川田文子さんにお会いして，「慰安婦問題をやっていてどうですか」とお聞きしたら「食べられないわよ」とおっしゃったんですね．年収 100 万円もいかないときがあったということをお聞きして，私はフェミに会う前から自立したいとか，結婚しなくても生きていきたいとか思っていたのに，それじゃあ真逆のほうに行ってしまうんじゃないのと（笑）そんなに大変でお金にならないことをなぜやっている人がいるのだろうということで，初めてフェミニストという人たちはどういう人なんだろうということをすごく知りたくなりました．

借り物ではない女の言葉

そうして手にとったのが，このシリーズの旧版です．図書館に行って検索して見つけましたが，参照枠組みとしての女の言葉というのが，私の知らないところに実はこれだけあったということに，ものすごく新鮮な思いをそのときに受けました．妻とか母とか，男にとっての女ということで語る言葉は耳にしていても，女であること自体は何なのかと問い直す言葉はそれまで耳にしたことがなかった．いかに自分が知らないうちに男の書き手ばかり読んでいたのかということも，そのときに初めて気づきました．

女になったらおしまいということは，私の場合は女の言葉への自信のなさがすごくあったと思います．だれの言葉かわかりませんが，「女の書くものは信用できない」という言葉が自分をすごく縛っていて，女性学の最初にもありますが，それまで無理して話して書いていた，だれかの借り物の言葉で話していたのが，フェミニズムと出会ったときに，女であるかもしれないというところにまず行って，そこからそれも含めて自分の言葉を探していきたいというところに，つまり初めてスタートラインに立てたような思いがありました．

失敗・矛盾・論争からも学ぶ

このシリーズには双方に矛盾する論争や，今から見るとちょっと古いなとか穴があるなというものも含まれていますが，その率直さがやはりすごくいいことだと私は思います．自分の言葉を探すときに，一から全部始めていくのではなくて，既にある多様な失敗，矛盾，論争からも学ぶことが必要ですから．

例えば，私は中絶の研究をしていますが，『母性』の巻に金城清子さんと柘植あづみさんの真っ向から対立するようなものが続けて入っています．金城さんは，生殖技術を使うのは女の権利だと言われ，柘植さんは，生殖技術が本当に問題を解決するのか，女が家族の中で抱えている問題は子どもさえ産めれば解決ではないのではないか，むしろ技術がもっと苦しいことを生み出したりするのではないかと言われています．

どちらが正解とかではなくて，これは両方入っていることで，自分はどうなのかなと考えさせられます．もっと多様なものも，フェミの外部まで行けばあるということもあるか

もしれませんが，やはりアンチフェミとしか出会えなかった自分の経験からいうと，この本を手にとればとりあえずフェミなんだというものがあるのは，すごくいいことではないかと思いました．

そのままの継承より自分の問題を考えること

先ほど重いものを手渡されたと岡野さんも言われていましたが，30 代としてどう継承しようかということについては，フェミニズムについて既存の団体を継承するということはやはりちょっと違うのではないかというのが自分の正直な思いです．

それぞれの世代にはそれぞれの運動があると思うので，それはかつての運動を否定するという意味ではなくて，やはり自分でつくっていかないといけないのではないか．じゃあ運動団体を自分で始めればということに関しては，もちろん始めている方もいますが，実は私はその前にもうちょっと立ちどまりたいと思っているところがあって，自分自身の問題，個々人の問題を問い直すことがもっと必要ではないかと思います．

慰安婦の支援運動になぜ自分が参加しなかったのか考えたときに，まず集団や団体に入ることにものすごく恐怖感がありました．「ジェンダーと教育」を編集された天野さんはじめ，みなさんわかっていただける部分もあるのではと思いますが，学校というところに 17 18 年もいると，団体や集団が個人のために存在できることが信じられなくなってきます．じゃあ，それが運動団体なら信用できるかというと，それもなかなか難しいですね．慰安婦の被害者の方は私にすごく影響を与えましたが，申しわけないのですが，本当に残念ながら，支援者の方たちは個々の人たちが何を考えているのか，なぜそこに自分の問題を見出して参加しているのか，ということはなかなか聞き取りづらかったというのが正直な感想です．私が聞き取れていなかっただけなのかもしれないですけれども．

そう考えると，学問か運動かということを最近すごくおっしゃる方がいますが，そういうことじゃないのではないかと思います．そういう二論法ではなく，なぜフェミニズムなのかという自分の動機を自分の言葉で語れる人がもっとふえていくと，どんな場に身を置いていてももっとふえていくことが，迂遠に見えて実はすごく近道なのではないかという気がしています．運動も学問もある獲得目標やディシプリンを掲げたときに，やはりそれに縛られて，個々人の素朴な思いがどうしても見られなくなってしまうという瞬間があるように思えますので，まずそこに立ち返ってみたいというのが正直な思いです．

本にたどり着けない人にどう届けるか

さて，この本の想定読者はだれなのかという最後のまとめです．15 年で新編が出るというのは，女の置かれた環境と運動の激変をあらわしていると思います．フェミが成熟したとよく言われますが，井上輝子さんが言われたように，問題は出そろってきたけれども，解決されて過去のことになってくれたことはそんなに多くない．大変なのはむしろこれからではないかというのが実感としてあります．

その意味でこのシリーズは，単なる資料集ではなく，生きて活用される財産目録であってほしいという願いがあります．そう考えると，パッケージからしても，博物館という話がありましたがやはり敷居が高い，図書館に入っている全集みたいという印象を受けてしまう部分があります．ですから，ここの本にたどり着けない人たちにどう届けるのかということはやはり考えていかないといけない．ただ，それは一つのシリーズですべてのことをやらなくてももちろんいいので，この後ブックトークの紹介などもありますが，届かない人にどう届けるかということをいろいろ工夫し発信していかないといけないかなと思います．

「私の問題」を語る言葉

最後に 15 年後に改訂版をつくるかということですが，自分もフェミに出会うまでにいろいろ遠回りしたことを考えると，15 年後の読者というのは，今のバックラッシュを見て育っているんだということに思いを致さざるをえません．出会うのはもっともっとむずかしくなるかもしれない．だけど男と女に社会が二分されて，その中である型にはめられる苦痛はなくならない．そうなったときに，やはり悩んでいる人，苦しい人が利用できる言葉を，ちゃんと届けることはすごく大事でしょう．誤解を恐れずに言えば，フェミニズムの言葉なんて，継承といっても悩んでいる人にしか届かない．ただ，いろいろな悩みの中で思想を磨いていけば，それでいいのではないか．

田中美津さんや，リブや女性学の初期のものには，やり場のない怒りを社会にぶつけたというすごいエネルギーがありますね．自分の問題を社会の中で解くというリブとフェミニズムの問題意識は今後ますます重要になってくると思います．私の問題は何なのかという言葉で始まるそれぞれのフェミニズムをやはり蓄積し，共有していくことが必要なのではないでしょうか．参考にできる，使える事例は多いほうがいいはずですから．ありがとうございました．（拍手）

十時　熱田さん，ありがとうございました．それぞれ自分の紹介を含めてくださってありがとうございます．それでは 20 代ということで草野さん，お願いします．

●20 代が読む　草野由貴（東京大学）

偏見なしにリブ，フェミニズムに出会う

「20 代が読む」ということでお話しさせていただきます草野由貴です．よろしくお願いします

まず私とリブ，フェミニズムの出会いについてお話しします．リブというと中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合（中ピ連）のネガティブなイメージが多く伝わっていたと思います．レジュメに引用してあるように，上野千鶴子さんは，「そのためにリ

ブに否定的なイメージを持つ人も少なくなかった」と書いておいでです（「日本のリブ」『新編 日本のフェミニズム１　リブとフェミニズム』岩波書店，2009 年，15 ページ）．
しかし私は大学に入って，たまたまジェンダー・セクシュアリティ研究に出会うまでは，リブも知らない，フェミも知らない，聞いたことがないという状態でした．そのおかげで，当時は中ピ連一色だった昔のメディアに影響されずに，むしろリブを記憶すべきものとして扱ったこの『日本のフェミニズム』シリーズでリブに出会ったことで，私のリブ，フェミニズムに対する印象は最初からものすごくいいものでした．

田中美津さんの「便所からの解放」はとても格好いいし，東京こむうぬの武田美由紀さんが子供をガキと言い放つというのはすごい豪快だしということで，リブに対する印象はすごくよかったです．また，いま私が研究している中でリプロダクティブ・フリーダムという問題にとても関心があるので，それに関する本を読んでも必ずリブが出てくるということで，いまだにリブの影響を感じざるを得ないと思います．

ヘテロ中心の『日本のフェミニズム』

２点目，そんな私とリブの出会いをもたらしてくれた『日本のフェミニズム』シリーズですが，気になることもあります．それはあまりにもヘテロ中心であるということです．幾つかの例外を除いて，非異性愛については例えばセクシュアル・マイノリティというくくりや，ゲイ・スタディーズというようなくくりで紹介されています．逆に言えば，この限られたセクション以外はヘテロが前提になっているのではないかとすごく感じます．ジェンダーに関しても同じことで，セクシュアル・マイノリティのセクション以外はみんなシスジェンダーが前提となっているのではないかと感じます．それはとても私にとっては居心地が悪い．

「セクシュアル・マイノリティ」を超えて

また，「セクシュアル・マイノリティ」といったときに，だれを指しているのかという問題があります．経験からの発言で申しわけありませんが，みずから「セクシュアル・マイノリティです」と名乗る方に私は出会ったことがないし，あまりいないのではないかと思います．そうした立場からすれば，「セクシュアル・マイノリティ」とひとまとめにされることは，当事者としてすごく理不尽と言わざるを得ない．いわゆるセクマイと呼ばれる人たちも，また一枚岩ではないというのは当たり前のことです．

三橋順子さんは広い意味でのトランスの中で，トランス・ヴェスタイト（異性装）の方は「病気ではなく趣味だからふまじめ」，「そういった人は性同一性障害という深刻な病気である人たちとは違う，一緒にしないでください」という差別を受けることがあると書いています（「トランスジェンダーをめぐる疎外・差異化・差別」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』明石書店，2010 年）．

さらにジェンダーを軸としないセクシュアリティについての論考もこれから考えていか

なければならないのではないかと感じています．異性愛か同性愛とか，ＦＴＭかＭＴＦという枠組みで，セクシュアリティの多様性を論じてしまうと，性別二元制を追認することになる危険性があるのではないかと思います．

また最近は，女ではないけれども，じゃあ男なのかといったら，それも違うと拒否する当事者の方はたくさんいると思いますし，こういった研究は新しいものかもしれないので，収録するに値するテキストがなかったと編者の方々は言われるかもしれませんが，今後はこうしたことや当事者の語りを注意して見ていかなければ，ヘテロノーマティヴであるとか，性別二元制を追認しているというような批判は避けられないのではないかと感じます．

多様なフェミニズム

３点目に移ります．これ（『新編　日本のフェミニズム』）はだれに向けられたアンソロジーなのかというお話です．

例えば割と簡単な文体で書かれているもりもり☆アイアイさんの「オナニーの人として吉本若手芸人のライブに呼ばれる」（第 6 巻所収）や，松浦理英子さんの「嘲笑せよ，強姦者は女を侮辱できない」（第 6 巻所収）に比べて，足立眞理子さんの文章「エコロジカル・フェミニズムの地平をさぐる」（第 2 巻所収）などは私にとってはとても難しくて，なかなか読めるものではない．だれを読者として想定しているのかなということは疑問に感じました．

その点を私自身どのようにとらえているかというと，割とポジティブにとらえていて，それは学者の論文に触れる機会が多い学生としての私に，学者以外の方が書いたものを紹介してくださった，そういう点がこのアンソロジーはよかったかなと思っています．逆もそうで，学生ではない人が学術論文に触れる機会をつくったという点がすばらしいかと思います．

さらに，先ほど熱田さんもおっしゃっていましたが，アンソロジーの中で対立するような文章が収録されています．たった一つのザ・フェミニズムのようなものをつくってしまわない点がいいかなと思います．タイトルこそ「日本のフェミニズム」ということで，日本すべてを代表しているかのような感じでちょっと怖いのですが，中身を見ればフェミニズムの多様性がよくわかるようになっているのではないかと思います．

フェミニズムはお勉強するものなのか

４点目，フェミニズムはお勉強するものなのかどうか，ということについてです．冒頭でも言いましたように，私とフェミニズムの出会いは大学で，つまり学問として出会いました．しかし，これは別に若い世代がみんなそうであるとかではなく，同年代の方でも運動していらっしゃる方はいっぱいいらっしゃると思います．

例えばレジュメには幾つか，団体によるブログを紹介しています．これは私がよく見るというだけで選出しました【資料】．ただのランダムなものですが，このほかにも個人の方々

がブログ上でいろいろな論考をしています．また，文字だけが媒体ではないということで，漫画，写真集，映像をつけさせていただきました．こうしたメディアからも私たちはいろいろなことが学べるのではないかと思います．

若いフェミニストは育っているか

最後に，若い世代のフェミニストは育っているのか，今日いらっしゃっている編者の方々の関心でもあるかと思いますが，そのことについてお話しします．

いま述べたことなどから考えても，若い世代にも確実にフェミニストはいるし，フェミ的な実践もあると思います．フェミになったら終わりという先ほどの熱田さんのお言葉は今もあまり変わってなくて，例えば就職活動を考えると，エントリーシートを企業に出すとき，卒論のテーマを書かなければいけない，しかし書けないということが起きるわけです．「ジェンダー」なんて書いたら採用されないと思うからこそ，フェミニストであることは隠すとか，ジェンダーという言葉を知っていることさえ隠して就活をするというのは，私は大学院にいるからそれは免れましたが，友人を見ていてすごく感じます．

けれども，先ほどの井上輝子先生のお話でもあったように，さまざまな問題は残されています．例えばヘテロで，しかもカップルだけが特権化されるような社会の仕組みなど，さまざまな問題がある中で，こうしたアンソロジーを若い世代の私たちは受け入れたり，ちょっと批判めいたことも言ってみたりしながら，第二派フェミニズムなのか，またポストフェミニズムなのかわかりませんけれども，そういった形で担っていくのかなと思います．

私からのお話は以上です．（拍手）

十時　ありがとうございました．

このまま引き続き，第３部のほうに進みたいと思います．皆さん，もう少しご辛抱ください．第３部「15 年後にアンソロジー改訂版をつくるとしたら？」ということで，最初のトップバッターは北村さん，お願いします．

◆第３部　15 年後にアンソロジー改訂版をつくるとしたら？　３つの編集方針をめぐって

●日本語圏を超えて（言語ナショナリズム批判）　北村文（明治学院大学）

明治学院大学の北村と申します．よろしくお願いします．

プログラムをごらんいただくとわかると思いますが，批判をせよということでここに立っています．大変難しい立場で，既にでき上がっているものに対して，あれがない，これがないという批判をしなければいけない．これは私自身がされるのも嫌な，たちの悪い批判だと思いますが，それをあえてするからにはここで，足りないことで何が失われてしま

ったのか，足すことで何を得ることができるのかということも含めてお話できればと思います.

「日本の」という線引き

まず,「日本の」という線を引いたとたんに起きる包摂と排除の問題です．最初に上野さんのお話にもありましたが，まとめるとかくくるとかいうことは，必ず政治的な行為となってしまいます.「日本の」と線を引いた途端にそこに入るものと入らないもの，あるいは入りたいのに入れないもの，入りたくもないのに入ってしまうものが生まれてしまう．そのことを包摂と排除と呼んでいますが，それが起きてしまいます.

それでは，この『日本のフェミニズム』というシリーズはどのような包摂と排除を行ったのでしょうか．旧版のほうの「編集にあたって」を引用します．これは先ほど上野さんも読み上げられた部分ですが，力強い文章なのでもう一度読ませてください.

「日本のフェミニズムは欧米の借り物でも輸入品でもありません．世界の女たちが国境を越えていっせいに声をあげたように，日本の女たちも，固有の経験を自分たちのことばで表現し，フェミニズムの思想的達成に貢献してきたと言えます．私たちはこのアンソロジーを編集にするにあたり，七〇年代以降，日本語でオリジナルに書かれたフェミニズム思想のなかから，従来の知を組み替える力を持った文章を選び出すことを通じて,「日本のフェミニズム」の財産目録をつくることを試みました.」（旧版「編集にあたって」）

明らかにこのアンソロジーは,「日本の」フェミニズムでなければならなかったわけです．西洋のフェミニズムが普遍である，お手本である，日本のフェミニズムはそれより遅れている，生ぬるいなど言われてしまうことに対して,「日本の」という線をあえて引いて，ではその固有の文脈の中で何が起きているのか，まとめることが前提だったと言えるでしょう.

新編での変化

ただ，ここで興味深いのが，増補新編になって,「日本の」の意味合い，トーンが少し変わるところです．引用です.

「本シリーズは，日本におけるまたは日本に関わる多様な女性や男性の経験を，自分のことばで語ったメッセージを収録したものです．日本のフェミニズムは，日本国籍を持つ女性や持たない女性，女性や男性，そしてそうした性別の分類を拒否する人々の関与によって築きあげられたものです.」（「増補新版の編集にあたって」）

ここでは「日本の」というものがもっとあいまいなものとしてとらえられていて，国籍にしても，性別にしても，そうした線引きが絶対的なものではないということが言われています．排除されてしまうものに対する配慮も感じ取れるわけです.

だとしたら，日本語でオリジナルに書かれたという言語の部分についても再考がやはり加えられてよかったのかもしれません.「言語ナショナリズム」という物々しい見出しを資

料に記しましたが，日本のことが言いたいのであったら日本語でしゃべれという大変に偏狭で乱暴な考え方ともなり得ます.

英語圏の「日本女性研究」

本当に一例としてですが，例えば英語圏には日本語のフェミニズムについて書かれたものが山ほどあります．暫定的に英語圏に焦点を当ててお話をさせてください.

英語圏の「日本女性研究」には，文学，歴史学，社会学，人類学，政治学などなど幅広いディシプリンが含まれます．中には日本のことを英語圏に紹介する，ちょっと揶揄的な言い方になりますが，縦のものを横にする，縦に書かれたものを横にするというようなわかりやすい研究もあります．特に 1980 年代ぐらいから，そうした文章資料に頼るだけではなく，実際に研究者自身が日本で暮らして，現実の日本人を観察し，日本女性らしさを探ろうという研究も増えてきています.

ただ，困ったことに，そうした研究は日本女性らしさとはどういうものだろうということを一生懸命求めるわけです．そうするとどうしても日本には主婦という人たちがいて，夫に仕える立場に満足しているらしいとか，日本にはＯＬという人たちがいてせっせと毎日お茶くみをしているらしいとかいうことにばかり注目が集まってしまうわけです.

そうすると，ステレオタイプが再生産されてしまいます．日本はやはりすごく奇妙なところで，女性たちがすごく抑圧されていて，かわいそうな犠牲者ばかりいるというような容易な結論が導かれてしまうわけです．これを私は学術的オリエンタリズムと呼んでいますが，何もわかってない，どうしようもない日本の女性たちを，いろいろなことがわかっている英語圏のフェミニストたちが見て，ときに落胆したり，いら立ったりするということが起きてしまいます.

こう考えていきますと，英語圏の日本女性研究と日本のフェミニズムの間には大きな隔たりがあると言わざるを得ませんと編者の方々ならきっと言われることでしょう．だから私たちは「日本の」とシリーズとくくった，あるいはそんなものはシリーズには入れたくないし，入れなくていいと．私も実際にそう思います.

英語圏の「日本のジェンダー研究」

しかし，今日強調したいと思うのは，英語圏にあるのはそういった研究だけではないというところです．ポストコロニアリズム，ポスト構造主義，ポストモダニズムとかいう思想の流れを受けて，日本研究自体も英語圏で大きな転回を経験してきています.「日本の」というのも絶対的，本質的なものではない．つまり日本らしさ，日本女性らしさなんていうものはないのではないかという考え方がされてきています.

ここに例として幾つか資料を私の趣味で挙げてみました.

「日本女性の系譜学」（e.g. Tamanoi 1998, Inoue 2006）

「日本男性研究」（e.g. Robertson and Suzuki eds. 2003）

「周縁」への着眼（e.g. McLelland and Dasgupta eds. 2005）

日常生活世界における葛藤，抵抗，交渉，撹乱への注目（e.g. Okamoto and Shibamoto Smith eds. 2004, Miller and Bardsley eds. 2005）

例えば「系譜学」という言葉を使いましたが，日本女性が歴史的な言説空間の中でどのように形づくられてきたのかというものもあります.「日本男性研究」というのも重要です. Robertson and Suzuki の編書のタイトルは，“Men and Masculinities in Contemporary Japan : Dislocating the Salaryman Doxa”．タイトルをごらんいただくとわかるように，“Men and Masculinities”とあえて複数形になっています．つまり日本の男性も企業戦士とか一家の大黒柱というイメージだけではなく，それ以外の多様な男性のあり方も注目されてきています.

いわゆるセクシュアル・マイノリティについても，よりニュアンスのあるとらえ方がされてきていると言えるでしょう．さらには家族や職場という日常生活世界においても日本女性はただおとなしい従順な存在ではない．時に葛藤もするし，抵抗もするし，交渉も，撹乱もする，能動的な存在としてとらえ直されてきているわけです.

調査者自身の置かれた立場

ここで，もう古典と呼ぶべきかもしれませんが，Dorinne Kondo という人の仕事を取り上げてみたいと思います．彼女は日系アメリカ人の人類学者で，東京の下町の和菓子工場にフィールドワークに行きます．すると，近所の人も工場の人も彼女をアメリカ人として全然扱ってくれないという問題に直面することになります.

「たいていの人は，私を日本人として扱うのを好んだ．時に不完全な，風変りな日本人として，それでも「日本人」として．実際，私がアメリカ人としてふるまおうとしても，気にもかけてくれない人もいた」（Kondo, Crafting Selves: Power, Gender and Discourses of Identity in a Japanese Workplace, The University of Chicago Press, 1990）

ですから，彼女は「西洋のフェミニスト」,「アメリカ人研究者」として，つんと澄ましているわけにはいきません．むしろ工場の職人さんからセクハラに近い扱いも受けたりして，それで気づきます．まさにこのタイトルにありますが，“Crafting Selves”．私たちは互いに互いをつくり合って生きている．日本の女性，男性がそこにぽんといるのではなくて，それが関係性の中から立ち上がってくる様子を見ていくわけです.

このように日常的な相互行為は，不平等であると同時に双方向的なものです．資料に挙げましたが，Robin LeBlanc，Nancy Rosenberger といった研究者も同様に，大変示唆に富む調査研究をしています．が，残念ながら日本語に翻訳されていませんし，当然，このシリーズにも入っていません.

しかし，こうした仕事は日本女性研究の枠組みを内側から撹乱する，新たな表象の政治だと言えるでしょう. 資料では自分で自分の文献（『日本女性はどこにいるのか』勁草書房，2009 年）を引用してしまいましたが，これらに私は「従来の知を組み替える力」を感じず

にいられません.

15 年後のアンソロジーは？

では 15 年後，どうしましょうということです．もちろん先ほどから申し上げていますように，英語圏にあるこうした仕事をぜひ組み込んでいきたいと思います．日本で日本語で活躍する研究者が書いたものではもちろんありませんが，同様に「日本におけるまたは日本に関わる多様な女性や男性の経験を，自分のことばで語ったメッセージ」だということができるでしょう.

最後になりましたが，もちろん私たちは日本語と英語という狭い世界の中で生きているわけではありません．グローバル社会なわけですから，日本の外から日本に来る方々，それから日本の中から日本の外で活躍する方々もふえる一方です．それぞれの言語圏，特に私は東アジアを念頭に置いて言っていますが，その中に日本のジェンダー研究に当たるものがあるはずです．ものすごく膨大なシリーズになるかもしれませんが，それでも他言語リソースを取り入れていくことを考える必要があるでしょう.

日本語圏を超え，さらに英語圏をも超えて

さらに最後に 1 点だけ．私はこのシリーズが日本のあるいは日本語の外に出ていくことも強く願っています．いま日本の大学で留学生を対象に英語で日本のジェンダー関係について教えるという授業もしていますが，もしこの岩波のシリーズが英語であったら，もっと違う授業ができたのにといつも思わざるを得ません.

こう言うと，英語を特別視するような，英語帝国主義者のような言い方になるかもしれませんが，英語にすることで英語圏を超えることが，少なくとも今のアカデミアでは逆説的に成り立つのではないでしょうか．日本語圏を超えて，そして英語圏も超えてというのが私の切なる願いです．ありがとうございました.（拍手）

十時　どうもありがとうございました．それでは続きまして齋藤圭介さん，お願いします.

●当事者性とヘテロセクシズム（異性愛主義批判）　齋藤圭介（東京大学）

はじめまして，齋藤圭介です．私はごらんいただければわかると思いますが，男です．男がフェミニズムを語ることについて違和感を持たれる方がいらっしゃるかもしれません．旧版が刊行された 15 年前ならいざ知らず，フェミニズムが大きな展開を遂げた今のこの状況においても，なぜそういった違和感があるのかということも含めて，皆さんと考えていけたらと思います.

先ほど北村さんからお話がありましたように，旧版と新版と 2 回，今まで『日本のフェ

ミニズム』はアンソロジーを編んでいます．それを受けて私たちが 15 年後にアンソロジーを編むときに，肯定的に継承するものと，批判的に継承するものとがあると思います．それらを，どのように考えたらいいのかということを念頭に置きながら当事者性と性別二元制について考えていきたいと思います．

性別二元性を前提とする編集

まず議論したいのは今回の編集のアンソロジーの意図です．先ほど上野先生からもお話がありましたとおり，アンソロジーを編集するというのは，誰のどの文章を載せ，あるいは誰の文章は載せない，といった編者の政治的な判断があります．ましてやフェミニズムの運動や学知を担った人たちである「当事者」がまとめるアンソロジーですから，決して客観的であるわけでもないし，中立的であるわけでもない．それは当たり前の話だと思います．編者らは，何をフェミニズムと呼ぶのかという「定義の政治」自体を，アンソロジーを編むということを通して遂行しているといえるでしょう．

今回このアンソロジーを見てみますと，男性ではなく女性の文章を採用するという，非常にわかりやすい基準で編まれております．では，ここでだれが女性になるのだろうかという素朴な疑問がでます．このアンソロジーは，とりあえず，男性ではないものを女性と呼びましょう，また同様に女性ではない人を男性と呼びましょうという排他的な性別二元制に基づいて編まれています．しかもそれを自覚的に党派的な理由から行っている．その編集の意図がもたらす効果については検討する必要があるかもしれません．

男性学とセクシュアル・マイノリティ研究の勃興

旧版から新版に移る 15 年の間にフェミニズムを取り巻く環境の違いを性別二元制という観点からみれば，男性学とセクシュアル・マイノリティの議論の拡大は非常に大きかったかと思います．15 年の間にフェミニズムを取り巻く男性学やセクシュアル・マイノリティの議論が格段に増えたということは，フェミニズム自身にもフェミニズムのあり方を問い直し，変化を促すことになってきたかと思います．

すなわち，フェミニズムが定着した結果，いろいろな担い手が出てくるわけです．その結果，フェミニストを名乗る人，あるいは担い手や運動の人たちが多様化してきたといえます．つまり，フェミニズムを誰が担うのかということが一義的にはわかりにくくなってきたということが，この 15 年間あったかと思います．

しかしながら，結果として新版を見れば，いまだに男性を排除した女性によるフェミニズムという性別二元制を維持しているようにもみてとれます．編者の先生方のお顔を見ればわかりやすいのですが，第 1 世代のフェミニズムを担ってきた方々です．これを世代的な問題として考えて，第 1 世代のフェミニズムの限界だと簡単に言ってしまうこともできるかと思いますが，そういう見方ではなくて，むしろ第 1 世代のフェミニストが自分たちのフェミニズム観を，編者の一人一人の間に緊張はもちろんあったのだろうけど，とはい

え広く「日本のフェミニズム」として提示してくれたということで，我々続く世代はもっと建設的に考えていきたいと思います.

男性にフェミニズムは担えない？

性別二元制を考えるときに，2 つの論点があるかと思います．まず一つ目，男性学の扱いです．男性にフェミニズムは担えないかどうかということは，皆さんご存じのとおり多く議論されてきたことの論点の 1 つだと思います．このアンソロジーは当事者性を非常に重視していますから，男性学の巻を除いては，一部の例外を除いて女性によって書かれています.

私自身は自分をフェミニストだと思ったことはありませんが，ただ，男性の中にはフェミニズムと共闘できると考えている方もいますし，また自分はフェミニストであるという男性も少なからずいます．しかし，このアンソロジーはそのような方たちを一律に採用しないという判断をしたわけです．当事者性の尊重はもちろん大切なことですが，明確な基準を徹底することで，男性と女性の間で対話の回路が閉ざされてしまうことが一方ではあるような気がします.

また旧版刊行時の 1995 年当時は，性別二元制に基づいた「女性」による意見がまだ有力な説得力を持ったカテゴリーだったと思いますが，女性内部の差異が強調されて久しい 2010 年，2011 年に，いまだ性別二元制に強くこだわることにどれほどの意味があるのかということは，やはり考えておいてもいいのではないかと思います.

先ほどもお話がありましたが，男性によるすぐれたフェミニズム論は数多くありますが，アンソロジーに男性のそのような議論は入っていない．結果，日本のフェミニズムは女性が担ってきたかのような印象を与えてしまう．新版『日本のフェミニズム』の前書きには，いろいろなセクシュアルティやジェンダーの人たちが担ってきたと書いてありますが，実際にページをめくってみますと，女性一色というわけです．ここにはアンソロジーを編む際に男性を排除するという力学といいますか，そのようなメカニズムが働いています.

残余カテゴリーとしての男性学

その一方で男性学を見ていておもしろいなと思うのは，男性を排除しているにもかかわらず，なぜか『日本のフェミニズム』の第 12 巻として，フェミンズムに入っているところです．それはフェミニズムのメインストリームとしては男性を排除するけれども，にもかかわらずフェミニズムの下位分野といいますか，そうしたものの 1 つとして男性を囲い込んでいる．あざといと言いますか，極めて政治的な判断も垣間見られるわけです.

ご存じだと思いますが，『男性学』の巻は，旧版は上野先生が編者になられて，新版は伊藤公雄先生に代わられています．女性から男性に代わっているわけです．穿った見方をすれば，これは旧版はフェミニズムの継(まま)子(こ)であって，新版になってゲットー化されたという言い方もできるかなと思います.

セクシュアル・マイノリティと性別二元制

性別二元制を考えるときに 2 つめの論点ですが，それはセクシュアル・マイノリティの扱いです．これはさきの男性学よりも，もしかしたら顕著に問題化されやすいかもしれません．このアンソロジーの目次の多くは，先ほど草野さんのお話にもあったかと思いますが，異性愛を前提としている感は拭えません．1995 年から急速に展開した学問という意味では，男性学をしのぐほどにトランス・ジェンダー，トランス・セクシュアル，インターセックス等々の多様性や流動性そして連続性に基づいた議論がさんざん行われてきています．クィア・スタディーズの影響もありまして，異性愛，同性愛といった性別二元制にとらわれない形でセクシュアリティやジェンダーの研究が進んでもいます．

それにもかかわらず，このアンソロジーは性別二元制を明確に置いていますから，性別二元制でいうとこの男，女というカテゴリーへの批判があるでしょう．また，異性愛の男女という側面への，同性愛者からの批判もあるでしょう．それから，トランス・ヴェスタイトの人たちやいろいろな批判がある．

もう少しざっくり言いますと，女性としてフェミニズムを担う人がいる一方で，女性であること自体を疑問に思ってフェミニズムをされる方もいます．このアンソロジーでは性別二元制が強固であるというお話はしましたが，それゆえに，性別二元制というのは，当事者が自分は男か女，どちらに入るのかわからない人たちにも無理やり男か女かを振り分けてしまうような，場合によっては無理やりにフェミニズム側に取り込んでしまうという側面もあります．先ほど男性学の扱いでは排除の力学が働いていると言いましたが，こちらは包摂の力学とでもいえましょうか．また，そうしたことで，多様なはずのセクシュアルティが一くくりにされている感も否めないかと思います．

15 年後のアンソロジーは？

旧版，新版には以上のような編集方針があったと思いますが，では 15 年後にどのようなことが考えられるのか．このアンソロジーのフェミニズムは担い手としてだれを想定していたのかということを考えてみますと，今お話ししましたように，男性は排除されている．それと同時に，セクシュアル・マイノリティにおいては包摂するという，性別二元制に基づいた当事者性のダブルスタンダードとも言えるような状況が起きているわけです．

新版の編集方針を見ますと，フェミニズムの拡大に伴い，フェミニズムの担い手も拡散したことを受け，それに呼応するように，できるだけ多くの当事者を包摂しようという編者の努力や苦労をみてとることができます．しかし，この 15 年の間に起こった男性学やセクシュアル・マイノリティの議論の隆盛を見ますと，旧版，新版ともに性別二元制を維持していて，編集方針は大きく変わっていないのではなかろうかという感想を私は持ちました．

以上を踏まえて，今後 15 年後，編集方針を考えるときに 2 つほど可能性があると思いま

す.

1つは，男性学やセクシュアル・マイノリティは各々のアンソロジーをつくることも一方では可能である．例えば男性学の文芸理論であったり，男性学に起きる性役割という形で，今回フェミニズムが行ったようなアンソロジーをつくることもできるし，セクシュアル・マイノリティに関してもフェミニズムが行ったようなアンソロジーを各巻つくることができるわけです．ただ，アンソロジーを編むためには研究の量と質が必要となってきますからさらなる研究の展開が必要ですが，1つにはそういう選択肢があり得ます.

これをフェミニズムからの排除や分離としてとらえて否定的に見るよりも，ジェンダー研究がよりふえてくるような，豊穣なジェンダー研究がなされていくという視点で歓迎する向きもあると思います.

もう 1 つは，フェミニズムという枠組みを残したまま，男性学やセクシュアリティを包摂するような，また別のあり方を考えていくということが考えられます．これはフェミニズムの外延を広げるということですが，幾分のジレンマも抱えてしまいます．フェミニズムが内部から女性だけの主義・主張から脱するということ，すなわち性別二元制を内部から乗り越えるということは，フェミニズムが女性というアイデンティティに依拠しない思想や運動になることを帰結します．でも，それは果たしてフェミニズムと呼べるのかどうかという問題も一方ではあります.

議論のために私自身の立場を述べておきますと，男性学やセクシュアル・マイノリティの巻を，それぞれアンソロジーを編んでもいいと思いますが，そこにはジェンダーというより広い枠組みで，一貫したアンソロジーをつくるような見通しを持って 15 年後改訂できるのではないかなと思います．以上です．（拍手）

十時　ありがとうございました．男性学やセクシュアル・マイノリティのアンソロジーということで，一体どこの版元がいくらで何部で出すのかなとどきどきします．続くお題はそれにかかわることですが，メディアの多様化をめぐる論点で，妙木さん，お願いします.

●メディアの多様化（印刷メディア至上主義批判）　妙木忍（東京外国語大学）

テクストの選択範囲と基準

皆さん，はじめまして．妙木と申します．よろしくお願いします.

私は 15 年後にアンソロジー改訂版をつくるとしたら，メディアの多様化についてどのような展望があるだろうかということを考えてみたいと思います.

これまでにもお話がありましたように，アンソロジーを編むときには「何を採用し何を採用しないのか」という選択基準が必要になります．これを編者が決めるわけですけれども，そのプロセスとしては二つのことがあります.

まずテクストコーパスの全体を把握するということと，その上で，ある基準に基づいて選別，スクリーニングをおこなうということです．ここにはまた問いが出てきまして，全体としてどの範囲を対象とするか，そしてそれが決まったら次に，どのような基準でスクリーニングをおこなうかという論点があります．

この前者に関して，対象となる資料の範囲に関しては旧版と新編はいずれも印刷メディアのみを対象としています．印刷メディアだけを採用するという手法の是非について私は考えてみたいと思います．

メディアが多様化する今日において，印刷メディアだけの採用は将来も可能だろうか，またそれは適切だろうか，という問いが生まれます．すなわちテクストコーパスの境界の定義をどうするか，という問いです．そこに付随して，スクリーニングをどうするかという問いも新たに発生します．

２点目です．例えばアンソロジーを編むという仕事ではありませんが，テクストコーパスの境界を決める上で，何を採用し何を採用しないかという論点については，私自身も研究の過程で直面した問題です．私は主婦論争の研究をしてきましたが，1950 年代以降の半世紀の資料を分析したら，やはりある年代からは電子メディアの影響は無視できないということが起きてきました．それは，主婦論争研究の場合は主に 90 年代以降でしたが，そこで私は，大衆的なマスメディアで議論された言説に対象を絞り，一般誌や新聞を対象としてスクリーニングをかけて，それを分析対象としました．その半世紀分を見てみると，やはりこの主婦論争というテーマ一つをとってみても，通時的にメディアの多様化が見てとれるわけです．

電子メディアへの視点

３点目にいきますが，アンソロジーを編む際の編集方針に論点を戻します．その文脈で考えてみますと，旧版，新編のアンソロジーには，印刷メディアのミニコミやチラシも収録されています．電子メディアにおける同じような言説を 15 年後に含めるかどうか，そして含める場合にどのような困難が伴うか，そして含める場合の基準はどうするかという論点が出てきます．

例えばウェブ上のアクセス件数の多いものに限定することになってしまうと，それだけではこぼれ落ちるものが出てくるはずです．それから旧版，新編のアンソロジーには，印刷メディアに発表された学術論文等も掲載されています．今日（こんにち），電子ジャーナルで研究成果が発表される機会が増えてきています．それを含めるかどうか，そして含める場合はどのような基準を用いるかという問いがあります．

例えば論文の中に審査のついた査読付きの論文とそうではないものがあるとすると，そこには序列のようなものが出てきてしまうのか，あるいは理系のように引用件数の多い論文の評価が高くなってしまう，あるいはそういう傾向が加速されてしまうのではないか，それだけではまたこぼれ落ちるものが出てくるでしょう．

私自身は将来，印刷メディアもこれまでのように膨大に存在し続けるのではないかとは思っていまして，印刷メディアと電子メディアの共存を私は予測しています．そしてアーカイブ化なども一方では進んでいくだろうと思います．

15 年後のアンソロジーは？

そのような中で，15 年後にアンソロジー改訂版をつくるとしたらということですが，印刷メディアに限定して，キーワードやテーマを設定して，それで基準と根拠を示して資料を収集することは，一つの方法です．しかし，私は自分でいま言ったことを直ちに否定しようと思っています．印刷メディアのみの採用はもはや不可能ではないかと考えています．もしかしたら，印刷メディアのみを対象としてスクリーニングをかけて，資料を集めた形のアンソロジーはもう編めないかもしれない，もしかしたら今回の新編が最後かもしれないと考えます．

しかしそれだけではなくて，やはり電子メディアを含めるとしたらどんな展望があるかということを考えてみたいのですが，それでもやはり選択基準と根拠を示す必要があるわけです．しかしそれは可能だろうかという問いがまだありまして，例えばどのような立場を採用するかで揺らぐでしょうし，それから方針が無事に決まったとしても，そこには制約と困難が伴うでしょう．

具体的には，例えば２点考えられます．１点目は，最初の上野先生のお話にもありましたように，著作権者が見つからないという可能性があります．それから編者，それを編む者がすべてをフォローできるかどうか，またそれを読めるかどうか，そしてそれができる人材がいるかどうか，というようないろいろな問題が出てきます．というのも，電子メディアの量が膨大で，それから情報がどんどん更新されて失われていく可能性があるからです．

このように考えてみると，将来アンソロジーを編むということは，検索のいろいろな機能が便利になるということでは有利かもしれませんが，先ほどのような理由から，理論上は可能だが実践上は極めて困難を伴うのではないか，と思っています．

公開の方法も電子メディアに？

さらに，もう一つ新しい論点を追加したいと思います．

一定のスクリーニングのもとでは，オーソライゼーションとカノナイゼーションが起きて，選ばれたテクストのブランド化が起きています．もしかしたら 15 年後，このようなスクリーニングをおこなうということ自体の意味が変わってくるかもしれないし，またスクリーニングをおこなうこと自体が成立するかどうかという問題が生まれるでしょう．

それでもなお，そのスクリーニングにやはり意味があると考え，そして先ほどの困難を乗り越えることができたと考えてみます．そうすると次は，パブリケーションの論点が出てきます．すなわち公開の方法です．これまでは印刷メディアで刊行されてきましたが，

ひょっとしたら将来のアンソロジーは，印刷メディアで公開するのか，それとも電子メディアで公開するのか，という新しい論点が出てくるでしょう．

私の話は今回，収集とスクリーニングに関してテーマをいただいたと思っていますが，ここにその公開の方法という論点をつけ加えて，短いですが以上で終わらせていただきます．ありがとうございます．（拍手）

十時　ありがとうございました．初めの予定どおり，これから 15 分間の休憩をとりたいと思います．皆さん大変お疲れさまです．

（休憩）

◆第４部

●コメントに応えて

十時　時間になりましたので，期待の高まる第４部のほうに入らせていただきます．第４部は，シリーズの各編者それぞれからのリプライ，そして若干の休憩を挟んで議論の場にさせていただきます．ここで司会をもっとパワフルな方に交代したいと思います．千田有紀さん，お願いいたします．（拍手）

千田　第４部を始めさせていただきます．今までいろいろな年代の方々の熱いメッセージと，15 年後にもう一度見直すとしたらどうなるのかという提案がありました．それらを受けて，編者の方々それぞれがどのようにリプライされるのかを楽しみにしたいと思います．

リプライは，巻数順に行います．上野千鶴子さん，江原由美子さん，井上輝子さんのお三方は２つの巻を編まれているので，２巻分をあわせてリプライしていただきたいと思います．リプライは１人８分です．

まず１巻と６巻を編まれた上野千鶴子さん，よろしくお願いします．

●編者からのリプライ

上野千鶴子――第１巻『リブとフェミニズム』，第６巻『セクシュアリティ』

今度は被告席に座る気分です．弁解がましいことになるかと思います．お手元の資料の全巻目次を見ながらお聞きください．

１巻は『リブとフェミニズム』というタイトルどおり，リブとフェミニズムの間に連続

性をつけるということ自体が一つのポリシーであったと言えるかと思います．世の中には，リブとフェミニズムは違うと断絶を強調する人もいるし，フェミニズムとジェンダー研究も違うと差異を言い立てる人たちがいます．しかし私たちは，リブがフェミニズムの一部であり，そのフェミニズムが女性学を生み，それがジェンダー研究に発展したという連続性を言語的に遂行しました．『資料 日本ウーマン・リブ史』全３巻の中から，リブの声を「暴力的」に切り出して収録したこと自体が，すでにリブの意図に反するというお考えもあろうかと思いますが，それぞれのテキストの著者からは，『リブとフェミニズム』と題するこの巻への収録に同意していただきました．

日本のリブは主婦フェミニズムにすぎなかったと言う人もいますが，主婦もまたリブの担い手となったことから，主婦リブという概念をつくりました．また，先ほどからマイノリティについていろいろな発言が出ましたが，エスニック・マイノリティと障害者の発言も収録しました．増補編は，バックラッシュの時代に編まれたということもあり，リブとフェミニズムの歴史を保存し記録し伝達しようと思った記録者，編集者，出版社，書店という媒介者たちもまた，メッセージの担い手だったことを忘れてはならないと考え，そうした人たちによって書かれたテキストも選びました．

私は６巻『セクシュアリティ』も編集しました．先ほど俎上にあげられたセクシュアリティの扱い方については，正直言って苦慮しました．６巻はヘテロノーマティブじゃないかと批判を受けましたが，セクシュアリティ・スタディーズといえばただちにセクシュアル・マイノリティを対象にするという短絡は，したくないと思いました．現実には圧倒的にヘテロノーマティブな社会の中で，ヘテロセクシュアルにジェンダー化されてしまった多数派のセクシュアリティを問うことなしには，６巻を編むことはできないと思いましたので，異性愛制度とは一体何なのかということを扱いました．

セクシュアル・マイノリティとみずから名のる人はいないだろうと思いますが，そこにも包摂と排除の政治があるというのは，ご指摘のとおりです．私たちが採用したポリシーは包摂戦略です．例えば，セクシュアル・マイノリティの中のトランスセクシュアル（TS），トランスジェンダー(TG)を女性カテゴリーに，また，レズビアン・スタディーズを女性学に，あえて包摂しました．ゲイ・スタディーズを男性学に入れるのはいいが，レズビアン・スタディーズは女性学とは別だという方もいないわけではありません．

TS，TG の中にも FTM(Female to Male)，MTF(Male to Female)がありますから，男性・女性のどちらに包摂するのかといえば，FTM も MTF も両方とも女性というジェンダーに包摂する戦略を採用しています．これは包摂の政治というものですが，著作権者である当事者の方々はそれに同意してくださいました．

なぜそのようなポリシーを採用したかというと，セクシュアル・マイノリティと言われる人たちの声を顕在化させることにフェミニズムも一定の貢献があったということ，そして彼らをフェミニズムの同盟者として迎えたいという動機があったのはたしかです．ではこの先，当事者性をとことん尊重すれば，カテゴリーはどんどん細分化してレズビアン／

ゲイ・スタディーズのアンソロジーとか，TS・TG スタディーズのアンソロジーを，それぞれ別々に編んでいけばいいかというと，私は必ずしもそうは思っておりません．

フェミニズムというジェンダー及びセクシュアリティを問う大きな流れの中から，さまざまに声をあげる人々が登場してきた，そのようなマイノリティが発言する思想の装置そのものをフェミニズムが用意してきたということを，私は歴史的に評価しています．当事者がフェミニズムの陣営に同盟者として加わることに同意してくださる限り，カテゴリーの細分化より統合のほうを，統合という言葉がふさわしくなければその間の連携や同盟を追求したいというのが，私たちのポリシーでした．

６巻について悔いが残っているのは，一つには，1990 年代以降，性的抑圧，性暴力，ドメスティック・バイオレンス，レイプ，セクシュアル・ハラスメント，反ポルノなどについては，急速にさまざまなアプローチが登場し，こうしたテキストは相当程度採用しましたが，抑圧としての性ではなく，快楽としての性，解放としての性にもう少し目配りすることができたのではなかったか，そうできればよかったなということです．その方面のテキストそのものが少なかったという事情もありますが．

もう一つ，レイプについてつけ加えておきます．今はなき『朝日ジャーナル』に発表された松浦理英子さんの「嘲笑せよ，強姦者は女を侮辱できない」は，なぜ性器に加えられた暴力が，例えば足の骨を１本折られたという暴力と同じにならないのかという非常に挑戦的な文章です．先行者も追随者もなく，単独で屹立して終わった文章でした．ここに採用しなければそのまま歴史に埋もれていたかもしれない文章を採録したのは，編者の合意によるものです．そういう貢献もこのアンソロジーにはあります．

もちろん悔いは多々ありますし，独善も多々あります．的確なご批判を受け，弁解をさせていただきました．（拍手）

千田　ありがとうございました．

次は２巻『フェミニズム理論』と，５巻『母性』を編まれた江原由美子さん，お願いします．

江原由美子――第２巻『フェミニズム理論』，第５巻『母性』

江原です．「日本のフェミニズム」の全 12 巻は，実は巻によって相当違う．残念なことに，２巻も５巻も旧版そのものにページ数をほんのちょっとしか加えることができませんでした．全部収録文献を選べる巻もあったのですけど，第２巻も第５巻も，ほとんど選べませんでした．旧版と新版の編集方針が同じで，そこに新味がないというのは当たり前のことでして，出版社の方針として，古いところは１ページとも減らさない，変えない，これは絶対守ってくれという制限の下で編集させていただいたものです．そういうわけで，２巻と５巻は非常に限界のある中で編集しなければなりませんでした．多くの方々の著作を十分に選べなくて，大変申しわけなかったと思っております．

先ほど，40 代，30 代，20 代，岡野さん，熱田さん，草野さん，それから 15 年後の編集方針について北村さん，妙木さん，齋藤さんからのコメントをいただきまして，どうもありがとうございました．齋藤さんのお話に出てきました，旧版は党派的でよかったのだろうかということについて，私もずっと考えておりました．それを新しい版でも引き継いだのは，先ほどのような事情からだったのですが，今後は，男性学は男性学で，クィア・セオリー（queer theory）はクィア・セオリーでアンソロジーを編むことができれば，そういう問題は消えていきます．それぞれの分野が独立しながら，相互に連帯し合える形で伸びていくといいなと思っております．

理論については，日本のフェミニズムは海外のフェミニズム理論を十分吸収・咀嚼出来ていないという実感があります．その意味でも日本の理論は「停滞」状況にあると思っております．また，グローバル化する経済の中で，日本に居住する女性たちにも海外に居住する女性たちにも，もちろん男性にも，ものすごく大きなことが起きています．その中でさまざまなことが新たに理論化されつつあるのですが，それと十分連携を持った形でフェミニズムの理論化が進んでいない．これをどうやって 21 世紀のフェミニズムにつなげていくかは，我々共通の課題だろうと思います．

私はナンシー・フレイザーを使って２巻の解説を書かせていただきました．モダンとポストモダンの社会構築主義の大きな流れが起きた後，格差が拡大している．こうした貧困の時代に，その問題と，承認の政治と言われる文化の多面性や人々の多様性を認めることの両方をうまく加味した理論の構築が，おそらく私たちの世代の課題になっていくと思います．２巻ではこのことを念頭に置いて，萌芽になるようなものを選んだつもりです．ぜひ読んでください．

母性のほうについても，社会状況の変化はこの 15 年でものすごく大きかった．出産，子育て，妊娠だけではなく，生殖医療では身体の商品化，あるいは，生殖医療の法制化問題など，いろいろなことが起きています．子育てについても，日本ではまだそういう状況ではないのですが，世界的には，再生産労働の国際分業化が大きく進んでいる．母性や再生産の領域が本当にグローバル化によって変化している．それをどうやって理論化していくのか――大変だと思いますが，そうした状況から予想される困難さを含めて，フェミニズムはどのような方向を目指すのか，なかなか見えていないと，解説に書きました．このような状況をとらえるフェミニズムは，萌芽はあるとしても，まだ理論化の途上にあると思っています．

15 年後はどうなっていくか．北村さんのご指摘のとおり，日本語だけでいくのは問題があります．エスニック・メディアは当然のこと，英語圏の文献も入れながらやっていく．また「日本の」というくくりに，どこまで意味があるか．「日本の」「アジアの」「世界の」，それから「それぞれの地域の」ももちろん入って，複数の領域で語られていくのではないでしょうか．

齋藤さんの提起も十分わかりました．

妙木さんの，電子メディアとどのような形で向き合うかということについてですが，私は 15 年後には，こうした本の形でのアンソロジーはないと思います．こんなこと言っていいのだろうか（笑）．つくらないと思う．恐らく意味がない．むしろ，だんだん死ぬほうの世代に属している私が，若い皆様にお願いしたいのは，紙媒体でつくった私たちの『日本のフェミニズム』を電子化して，どうぞ電子媒体のどこかに入れて検索して使えるようにしてください，ということです．それだけはぜひお願いします．

さまざまなフェミニズム関連，ジェンダー研究関連のこれまでの研究成果を電子化したとき，紙媒体はだれも見なくなり，そこで世代が切れてしまうようなことにはしないでいただきたい．もちろん私たちのアンソロジーだけを特権化したいわけではありませんが，それを最大の目標としていくべきなのではないか．

出版社がどうなるか，紙の出版がどうなるか，大学がどうなるか，学術言語としての日本語がどうなるかなど，私たちの前にはいろいろな問題が押し寄せています．そう考えると，15 年後に紙媒体のアンソロジーはつくれないだろうと思いますが，それでもつなげていくことは非常に重要です．どういう形にせよ，フェミニズムを世代を超えてつなげていく．ただし，何もかも残すことはできない．質的にセレクトする作業が，世代を超えて我々がテキストを継承する上で不可欠です．

これまでは出版社の媒介によって何とかその作業ができてきました．学術や出版のあり方が大きく変わろうとしているときに，例えば，ジェンダー研究，フェミニズムのような相対的にマイナーな領域を，電子化その他の状況変動の中で次の世代に継承していくことは，非常に大きな課題だと思っております．そういう意味で，本日の皆様方のご指摘は大変心にしみました．（拍手）

千田　どうもありがとうございました．次は３巻『性役割』と７巻『表現とメディア』を編まれた井上輝子さん，お願いします．

井上輝子――第３巻『性役割』，第７巻『表現とメディア』

最初に，上野さんから「江原さんの発言だと，増補の方針については出版社にすべて責任があるように聞こえるから，それを修正しておけ」と言われましたので，一言．（笑）アンソロジーの編集は編集委員会の責任でやっています．旧版をそのまま維持した上で，少しプラスアルファを加えるという増補改訂の方針は，私たち自身が決めたことです．しかし，それに江原さんも私も縛られて，その制限の下で収録するテキストを選ばざるを得なかったということも確かですが．

今日の皆さんのお話を伺って，まず若い世代の方々が，『日本のフェミニズム』の旧版を読んだことがきっかけでフェミニズムに関心を持たれたり，あるいはそれまで考えていたこと，うつうつと思っていたことを表現する言葉を獲得されたということを知って，こういうアンソロジーを出してよかったなあと，あらためて思いました．私たちがこういうも

のをつくるにあたって，次の世代の人たちにぜひこれを活用して，力にしてほしいと願ったわけですから，皆さんのお話はすごくうれしく聞かせていただきました．

私は３巻と７巻を担当させていただきましたが，性役割もメディアも 1995 年以降，大きく変化しました．３巻『性役割』に関して言いますと，旧版のときには性役割は女性学のキーワードとして非常に意味があったと思いますけれども，1990 年代後半以降，性役割という言葉はあまり使われなくなり，ジェンダーに取って代わられていく．ジェンダー概念の導入は，とても大きな意義があったと思いますが，一方で，性役割というとらえ方で見ていかなくてはいけない部分もまだかなりあります．

妻，母，主婦というステレオタイプ的な生き方モデルは，今ではだいぶ影が薄れてきました．しかし実際には，公的と言われる領域の職業，暴力装置の最たるものとしての軍隊，政治の場などに女性が入っていっても，そこで新しい性役割が再生産されていくという問題，また，例えばケア役割というものが男性によっても担われていくことにはなるんだけれども，そこで改めてまた男女の担い方の違いが出てくる．新しい葛藤や新しい問題が，性役割をめぐってやはり出てきている．３巻にはそうした事柄についての幾つかの研究を新たに収録させていただきました．

また，女性学がセカンドステージに入ったのと同様，メディア研究も 1990 年代後半以降，カルチュラル・スタディーズ等の影響を受けて，新しく転換してきました．７巻『表現とメディア』では，そうした中で次々に出てきた新しい研究を入れさせていただきました．

先ほどの妙木さんのお話ともかかわりますが，私たちがテキストコーパスとして選んだ材料は，もちろん言葉だけではありません．特に７巻では，絵本，映画，演劇，絵画などについてのたくさんの研究を対象としました．ただ，今回の新版では言葉で分析してあるものを収録したのです．「15 年後にどういう形でどういうものを収録するのか」を考えるとき，妙木さんから電子メディアというお話がありましたけれども，多分そちらに広げていくことになるだろうと思います．あるいは，広げ過ぎて成立しなくなるのかもしれません．

ただ，やはり印刷メディアと電子メディアとでは，選択の基準や広げる範囲は違ってくるだろうと思います．私は電子メディアのことはよくわからないのですが，電子化したテキストのアンソロジーをつくるなら，例えば発言者を特定できるのか，匿名のものはどうするのか，あるいは電子空間であっても公共空間の中で共有されるものでないと，収録するのはまずいだろうということなど，いろいろな新しい条件を考えていかなければならないだろうと思います．しかし，それは新しいメディアに詳しい方たちが，新たに基準を設けていただければ可能になるのではないでしょうか．

それから北村さんが指摘した日本語という問題があります．私もやはり日本語に限定せず，もっと広げていくべきだと思います．ただ，学会誌の投稿基準などでもそうなのですが，英文ならまだしも，中国語はどうするのか，韓国語はどうするのか，スペイン語はどうするのか等々，多様な言語の文献をまとめていくときには，やはり編集する側の幅と力量が問われてくると思います．

齋藤さんのお話は，私もこれから考えていかなければいけないテーマだと思います．私としては，女性と男性など，さまざまな性別の当事者それぞれがアンソロジーを編むのと同時に，双方が交流し合える場も必要ではないかと考えています．（拍手）

千田　制限時間ぴったりでありがとうございました．

次は，本来でしたら４巻『権力と労働』を編まれた大沢真理さんの順番ですが，たった今会場に到着されたばかりですので，先に『権力と労働』から分離独立した８巻『ジェンダーと教育』の編者天野正子さん，よろしくお願いします．

天野正子――第８巻『ジェンダーと教育』

今日の登壇者のなかで最年長の，正真正銘のオールド世代の天野です．敗戦の年に小学校２年生でした．私が立ち会うことになったのは，男女共学とか，女性への大学の門戸開放とか，家庭科の男女共修という戦後教育の幕開けが，高度成長とともに性別特性論に基づく戦後型のジェンダー秩序に向けて再編成されるプロセスでした．そして，それに反対する女性たちの運動とリブの誕生，女性学やジェンダー概念との出会い，新世紀に入ってからのバックラッシュという，時代の転換点にも立ち会いました．

その意味で，ジェンダーの視点から教育を見直したら何が見えるか．第１波フェミニズムを頭の片隅に置きながら，1970 年以降のフェミニズムの軌跡の中に読み解くアンソロジーづくりというのは，私の歴史体験を相対化し，文献を選ぶ私自身の立場性が問われる，貴重な知的な営みであったと私は考えております．そこから３点ほどコメントへのリプライをしたいと思います．

第１点は，齋藤さんがこのアンソロジーは新版・旧版ともに第一世代フェミニストのフェミニズム観の提示であるとまとめられました．私は，「第一世代のフェミニストのフェミニズム観」とひと括りにするとらえ方に，かなり違和感を持ちました．多くの人が指摘されるように，「女」とか「ゲイ」とか，カテゴリー化の権力作用それ自体の問い直しをフェミニズムはやってきたわけです．第一世代に伊藤るりさんや伊藤公雄さんを入れて大丈夫なのかと思うと，何だか今日のシンポはフェミニズムをめぐる旧世代と新世代の対決――対決まで行かなくても，今までのところを聞いていますと，旧世代は私も含めて言い訳をしているような気がします．生産的な対決になればいいなと思っておりますが……．

また，編者の間で共通したフェミニズム観があるのかということも考えなくてはなりません．もちろんフェミニズムを「当事者による自己定義，自己解放」ととらえる点については，きちんとした合意がありました．でもそれ以外は，何を採用し，何を採用しないかについては編者に自由に任されていたというのが，私には非常に心地よかったわけです．

私の場合，採用基準は二つあります．一つは，女であること，女にされてしまうことの意味や問題が発現してくる「方法としての現場」に足をおろし，その経験を言語化しようと苦闘する文献を選んだこと．それは抽象度を上げて普遍主義を求め，そこから現実を偉

そうに見おろす従来型の研究の方法論に，フェミニズムは疑いを持っているからです．

もう一つは，教育の学習の現場でのみずからの実践に迷い，逡巡し，失敗し，しかもそれらを共有しながら問題の打開を図ろうとする経験の開かれ方を重視しました．実は，教育の現場でどのようになれば平等と言えるのかということ一つをとっても，答えを出すのは簡単ではありません．子どもの置かれた状況が多様化し複雑化している現在，とくにそれが言えるわけです．フェミニズムには一つの正解や到達点という考え方はなく，重要なのは経験にもとづく開かれた議論だというのが私のフェミニズム観です．ほかの編者にもそれぞれのフェミニズム観があると思います．共通性の中の多様性を読者の方には酌み取ってほしい，そしてご自身のフェミニズム観と対話をさせてほしいと思っております．

２点目ですけれども，熱田さんや草野さんのフェミニズムとの出会いが，大学の中の女性学やジェンダー研究ではなかったというところがおもしろかった．リブの記憶や慰安婦問題を通じてフェミニズムと出会われた．それはつまり，大学という制度の中で女性学やジェンダー研究を専らやってきた，私たち編者に対する痛烈な批判である，そのように受けとめたいと思っております．女性学の黎明期には，熱田さんが言われるように，女にされてしまう自分に突き刺さったとげを問うということと，運動と研究とが三位一体であった非常に幸せな時期がありました．

大学という制度の中に女性学が位置づき，さらにジェンダー研究と名乗るようになり，研究を洗練させればさせるほど，現実からの解離が問われるようになってきた．だからといって私は，ジェンダー研究が既存の学問知を書きかえるためにも，アカデミズムの世界で市民権を得ることの重要性は否定できません．大きなジレンマがあります．虫がよ過ぎる願いかもしれませんけれども……，そうした状況への不満が，草野さんや熱田さんのように，もっと自分たちに切実で必要な女性学，ジェンダー研究をやりたいという意欲と関心を生み出し，現状を乗り越えるきっかけになれば，非常に逆説的ではありますが，大きな意味があるように思います．

第３点は，男性を見事に排除し，同時に女性内部の差異を過少評価しているという齋藤さんの評価についてです．これは教育に関する限り，半分当たっており，半分当たっておりません．なぜ，女性内部の差異にはこだわり，男性内部の多様性には目を閉じてしまったのか，その理由を考えようと思ったんですけれども，時間が来ました．後で何かあればお答えしたいと思います．（拍手）

千田　４部の後半で討論をしますので，そのときにぜひお願いします．

次は，できたてほやほやで，またまるごと新編の９巻『グローバリゼーション』の解説を書かれた伊藤るりさん，お願いします．実は，編者全員で編んだのだから，各巻については解説を「書いた」というのが正解だという苦情が入りましたので，謹んで訂正させていただきます．

伊藤るり――第９巻『グローバリゼーション』

こんにちは，伊藤です．よろしくお願いします．９巻の担当で，全 12 巻が完結する記念シンポの足を引っ張った張本人でして，この１年か２年間はずっと針のむしろの上にいるような気持ちでした．今は指名手配されている犯人が現われました，という感じです．一応終わったらいいかな，という気持ちに今はなっているのですが，この間いろいろご迷惑をおかけした方々にはおわびをしたいと思います．

いま天野さんから第一世代の問題について触れていただいたので，ちょっとほっとしました．私自身は専門が国際移民研究，国際社会学で，ジェンダー研究センターというところに所属していたこともありますけれども，やはり遅れてやってきたフェミニストという面があるかなと思っております．『グローバリゼーション』という巻をやりなさいとお声がかかって――こういう場でないと正直に言えないと思うので申し上げますと――最初は本腰を入れてテキストを選ぶという感じではなく，アシスタント気分がちょっとありました．

いざ本気になったとき，何人かの方々が触れられた『新編 日本のフェミニズム』の「日本の」というくくりがとても困ったなと最初に思いました．皆さんもよくご存じのように，グローバリゼーションという現象は，さまざまな社会関係が国内の領土から離れていって，それが再国家化，再ナショナル化されるというすごく複雑な往復運動があり，その結果としてグローバルなものが生まれていくということだろうと思います．テキストコーパスは，最初から体系的に網をかけるという感じではなかったので，体系的に方針を立ててきれいに選んだという自信はありません．ただ，直感的にどういうものを取り上げたいかという意味での基準はありました．

国境を越えるフェミニズムというものが日本をめぐってどういう形で展開してきたか．担い手の多くは，日本の国家の中では，例えば日本の国籍を持たないとか，最近日本に来たとか，在日の方々であるとか，沖縄の基地の問題にかかわっている人たちなどです．さまざまな意味で「日本のフェミニズム」と言われると「あれ？」とご本人たちも思うでしょうから，最初は「「日本におけるフェミニズム」となりませんでしょうか」と上野さんとお話ししたこともありました．シリーズのタイトルは決まっていて，変えられなかったわけですけれども，私にとってこれはすごく大きな問題で，解説をどう書くか非常に苦労しました．

私は，育つ過程で日本人ではないと周りの人に言われてきた帰国子女のはしりです．６年とか９年とか非常に長い期間，日本を離れていたので，いつも日本語の発音がおかしいとか，いろいろなことを言われながら育ってきました．そういうこともあって，当事者性の問題に関心があるのだろうと思います．

解説で書いたように，テキストを収録してよいと言っていただけた著者の方々に，まずもってとにかく感謝しています．日本のフェミニズムはある種の可能態であり，いま進行しているそのグローバル化はさらに続いていくのと同時に，1970 年代ぐらいまでさかのぼることができる．実を言うと，グローバル化の問題は既に旧版の中にあり，改めて巻を立

てて，旧版にないものを選ぶのはなかなか難しいことでもありました．ですので，ぜひグローバリゼーションの巻だけではなく，全 12 巻にグローバリゼーションの問題がかかわっていると見て，読んでいただけたらと思います．

国際移民の研究をしているので，私にとって移民女性の問題は，近い問題としてあります．日本の社会で日本のフェミニズムと呼ばれているものが，来日して定住するようになったさまざまな背景を持つ女性たちとどのようにつながっていけるのかは，非常に大きな問題です．この人たちが，例えば日本語を使って発言する場がいつできるのかという問題もあります．日本語で表現できる世代はまだ育っていないということもあり，私の気持ちとしては，９巻についてはそこまで読み込んでいただけたらなと思っています．

幸いなことに，いくつか日本語のテキストもありましたので収録しましたけれども，日本語になっていない，言葉化されていないものもあると思っています．これらにどう向き合うかが今後の課題としてあるのではないか．それは恐らく，日本というものが移住女性にどのような言語的な支援策を講じ，教育をしていくかということともかかわっているでしょう．「日本の」という場合に，日本そのものが問題になっているという部分が，９巻ではとても多いだろうと思います．

残された課題としては，今回は取り上げることができなかった国際協力とフェミニズムの関係ということもあります．開発援助に私たちの税金がものすごく使われていますから，今後，問題になっていくでしょう．二つ目は，国家の視点ではなく，本人の視点からとらえると，二重国籍とか，あちこちを行ったり来たりする人たちのトランスナショナルなフェミニズムの問題というのは取り上げにくいだろうということがあります．実際今回は取り上げられていません．三つ目には，江原さんの指摘した再生産領域のグローバル化も，今回は力不足で入りませんでしたけれども，これから問題になるだろうなと思っております．（拍手）

千田　ありがとうございました．

同じく新編集の 10 巻『女性史・ジェンダー史』の解説を書かれた加納実紀代さん，お願いします．

加納実紀代――第 10 巻『女性史・ジェンダー史』

こんにちは，加納です．私は編者の中で唯一の 70 代かと思っていましたが，天野さんがいらっしゃいました．10 巻に関して言いわけとか悔いはいっぱいありますが，ここではそういうことをごちゃごちゃ言うよりは，15 年後の改訂を目指して，多分 15 年後は私はもう生きていないでしょうから，かなり無責任な希望を言わせていただこうと思っています．

私は，日本のフェミニズムにおける女性史・ジェンダー史の意義は，一言で言えばジェンダー秩序の歴史構築性を明らかにすることだと思っています．それでいえば女性史・ジェンダー史の研究蓄積は非常に厚い．にもかかわらずバックラッシュさえ起こってしまう

のは，せっかくの研究の蓄積が一般社会の歴史認識に反映されていないことに要因があると思うのです．だからこそ 15 年後に改訂版を出してほしい．

今回アンソロジーを編集して蓄積の厚さを実感しただけに，なぜそれが生かされないのかということがまた強く胸に迫って来ました．一つは歴史教育の問題です．せっかく蓄積したジェンダー視点が歴史教育に生かされていないということ．もう一つは大衆的なメディアの問題です．ＮＨＫ大河ドラマなど時代劇的テレビドラマが最近は非常に多いし，不況で先の見えない状況になればなるほど，歴史ドラマが盛んになるわけですが，それらにジェンダー史が切り開いたものが反映されていないということがあります．

例えば，今年のＮＨＫ大河ドラマは「江(ごう)」という，織田信長の姪を主人公にしたものです．昨日，再放送を見てみたのですが，お市の方も，江を含む娘３人も，みんな正座をしていました．この時代に身分のあるお姫様方が正座をすることはまずあり得ない．市の妹のお犬の方と言われている人の図像などを見ますと，明らかにあぐらをかいています．あるいは立てひざをしている．正座をするのは犯罪者で，高貴なる方は正座などしません．しかしドラマでは，男はあぐらをかくけれども女は正座をするという，明らかにジェンダー化された形で提示されています．

それから最近大評判のよしながふみのマンガ『大奥』は，女の世界とされている大奥の男女を逆転すると何が見えてくるかという意味ではとてもおもしろい．これまで大奥は，どろどろした愛欲と権力闘争のうずまく女の世界と表象されてきて，よしながふみさんはそれを男女逆転させた．しかし最近は，大奥にも結構男性が出入りしていたという新しい研究も出てきています．ジェンダー秩序をそのままに男女を入れ替えるだけでなく，そうした女性史・ジェンダー史の成果を取り入れた新しいサブカルチャーがでてくれば，歴史的につくられたジェンダー秩序を解体していく上で非常に意味があると思っています．

歴史教育でも，「新しい歴史教科書をつくる会」が歴史教科書をつくった結果として，中学校の歴史教科書から慰安婦の記述が削除されたことはご存じでしょう．けれども単に慰安婦の記述が削除されただけではなくて，教科書の姿勢自体が性役割の超歴史性とか，いわゆる本質主義に染まっています．『新しい歴史教科書』の改訂版では，原始の狩猟採集時代には，男は狩猟で女は採集をしていたとありますが，その背景には女は空間認識がだめで手近なところでしか行動できない，つまり「地図が読めない女」という本質主義的ジェンダー認識があります．また推古天皇＝伝統，聖徳太子＝文化といった性役割もしっかり書かれています．このように，歴史教育がジェンダー秩序を再生産している現状にどう切り込んでいくかを考えなければいけないと思います．

今回，天野さん担当の８巻『ジェンダーと教育』の中には，家庭科教育，性教育におけるバックラッシュへの対抗の文章が入っています．歴史学としても対抗しなければいけなかった．ですが，私が見落としているだけかもしれませんが，それがないわけです．これからは歴史教育やメディアにおける歴史ものに対しても研究者は積極的に発言していき，それが 15 年後にきちんと集積されることが必要だと思います．

資料に目次がありますが，10 巻では女性史・ジェンダー史の視座と方法をめぐる部分にかなりスペースをとっています．８０年代から９０年代にかけて，言語論的転回だとかジェンダー史という概念が入ってくることによって歴史学の方法論や視座が大きく変わってきたので，それを取り上げる意味はあったと思っています．こういうことを言うと，後でご批判が出ると思いますが，私が考えるフェミニズムにとっての歴史の意味は，結局はジェンダー史になると思います．つまり，ジェンダー秩序の歴史構築性を解体するために，それを明らかにすることがその意義だとすると，結局，ジェンダー史に集約されていくでしょう．

私は今回は排外主義と男性排除を貫きました．「当事者とは誰か」といったとき，日本におけるジェンダー秩序の抑圧を自覚し，そこからの解放を願った人びとを当事者としたからです．けれども今後は，最近研究が進んできている植民地的近代を視野に入れる必要があると思います．アジア，とくに東アジアに領域を広げて，その中での当事者性を日本の場合は加害性・被害性も含めて研究していかなければ，日本のジェンダー秩序の解体に向けても動けないのではないか．そういう意味で当事者の定義を「日本」から広げる必要があると思っています．（拍手）

千田　ありがとうございました．ジェンダーを相対化するためには，ジェンダー史しかない．そこまでは言われていませんけれども，なかなか刺激的なマニフェストがありましたので，討論につなげていきたいと思います．

11 巻の解説を書いていただいたのは斎藤美奈子さんですが，今日はインフルエンザでお休みです．代わりにメッセージをいただいていますので，ここで読ませていただきたいと思います．

斎藤美奈子（メッセージ代読）――第 11 巻『フェミニズム文学批評』

「時ならぬインフルエンザにやられ，熱が下がりません．やむを得ず，本日は欠席させていただくことにしました．申しわけありません．『日本のフェミニズム』には上野先生に引っ張り込まれてということで途中参加という形でしたが，『フェミニズム文学批評』の巻を担当させてもらったことで，私自身もフェミニズム批評の 40 年を振り返るというまたとない機会になりました．斎藤美奈子に文句を言ってやろうと待ち構えていた皆様，ごめんなさい．ご盛会をお祈りしています．斎藤美奈子」

千田　以上，斎藤さんからのメッセージでした．（拍手）

では 12 巻『男性学』の解説を書いていただいた伊藤公雄さん，お願いします．

伊藤公雄――第 12 巻『男性学』

トリは嫌だなといろんな意味で思っていたんですけれども，トリでなくてよかった．大

沢真理さんが僕の後で話してくれます．今回の編集委員のラインナップはすごくおもしろくて，アイウエオ順に，天野正子先生をトップに，僕，伊藤公雄，伊藤るりさんと続きます．みなさん，編集委員のうち７人の姓がア行ということに気がつかれましたか．加納さんと斎藤さん以外，みんなア行だという大変おもしろい布陣です．どうでもいいことですが．

ぼくは，編集委員であるとともに，『新編 日本のフェミニズム』の 12 巻『男性学』の解説を担当しました．このアンソロジーのなかで男性学がどういう位置にあるのかという議論は，齋藤さんもさっき出されました．でも，それ以前に「そもそも男性であるあなたが何でここにいるの」という問題がもしかしたらあるのかなと思っています．実はちょうどこのシリーズの編集委員をしているときに，いくつかの研究者の集まりで，10 人前後の女性の中に男性は僕１人という委員会があと二つありました．まるで名誉女性のようでした．ですが，僕は名誉女性とは思っていません．フェミニズムやジェンダー平等に開かれた男性学・男性性研究者としての立場で，どこの場にも参加していたたつもりです．

これは齋藤圭介さんのお話とも絡むんですが，『新編 日本のフェミニズム』の中で，男性学は，その内部か外部なのか，それとも第三の道かという位置づけが必要になってくる．先ほど天野先生がおっしゃったように，脱カテゴリー化ということを考えたら，内部であり外部であり両方だということなのかなとも思います．同盟者や連携者という言葉もありましたけれども，ある面，僕は両義的な立場でかかわらせていただいたつもりです．

両義的な立場というのは，一見いいかげんな立場のようです．でも，両義性という場で踏ん張るというのは実は結構大変なことなんです．ジェンダー問題に限らず，僕は両義性という場で踏ん張りながら生きてきたかなと思っています．それこそ男性学の本を最初に書いたころは，「あなたのは全部フェミニズムの剽窃よ」とか「男の言うことは信用できない．適当なことを言う男が一番危ないのよ」とか，いろんなことを女性たちから言われました．そうした声に対して我慢しながら何とか今までやってきたわけです．その経験からも，男性がフェミニズムに関与していくというのは，しんどい部分と楽しい部分と両方あるなと思います．

上野さんは僕のことを「伊藤 L」と呼びますが，この「L」は，京大文学部闘争委員会の「Ｌ」です．あちこちの学部に伊藤さんという活動家がいたので，文学部の伊藤ということでつけられたわけです．というわけで，僕は 1970 年代に学生運動をやってきました．昼間はゲバ棒，夜は少女漫画という感じで，ウィークデーは戦闘服でデモに行ってゲバルトをやったりしていた一方，女性のものの服を着るのも大好きで，休みになると，当時は割と女装をして歩いていた．イタリア留学中に２人の女性と３人で歩いていたら，イタリア人の男性が僕だけに「かわいこちゃん」と言ったぐらいです．今では見る影もないんですけれども．かつては髪の毛も長かったし髪の毛もたくさんありましたし，結構，乙女チックな生活をしていた時期があったわけです．

それはともかく，僕自身，1970 年代にいろんな理由でリブの男性連携者のような形で活

動した時期があります.「当事者性」が今日のテーマの一つかもしれませんけれど，例えば先ほどのグローバリゼーションとの関連で言うと，日本人が当時の韓国の民主化運動に連帯できるとすればどういう形か，やはり日本人としてしかかかわれないのではないかという問題などとも直面しました．いろいろな形で当事者性に向き合わざるを得ない時代でした．その中で，男性として性差別の問題，今でいうジェンダー不平等をどうするかということにかかわろうというのが，ちょっとお利口ぶった説明ですけれども，この問題にかかわる自分の出発点だったかなと思います.

僕はフェミニストではないと言い続けています．12 巻『男性学』の解説でもそうはっきり書いています．もちろん男性のフェミニズムや，逆に言うと女性の男性学を僕は否定するつもりはありません．ただし，僕の立ち位置は，ジェンダー平等に開かれた男性学・男性性研究の立場です．今日もそうした立場からかかわらせていただいていると思っています.

解説で書かせていただいたように，男性の女性学より，むしろ女性の男性学のほうが僕らにとってはありがたいなと思うところがあります．僕らに見えないものが突きつけられることがしばしばあるからです．齋藤さんが前回は，フェミニズムの継(まま)子(こ)であって，今回はゲットーと言われました．確かにゲットー化されているかなという印象もないではない.

アンソロジーについていえば，フェミニズムもそうですが，現実の問題と向き合う論文やさまざまな著述を編集するという作業は，常に過渡期の編集という形にならざるを得ないのではないかと思います．その意味で，決定版は出せないし，出さない方がいいのかもしれません.

15 年後に次のアンソロジーを編集するかどうかわかりませんが，そのときも，フェミニズムやジェンダーなどの位置づけが変化する中で編集せざるを得ないのではないか．ただし，男性学やクィア・スタディーズの独立したアンソロジーをつくってもいいのではないかという提案については，僕もそう思います．むしろ僕らが 1990 年代からいわゆる男性運動をする中で，そういうものを準備できなかったということを，僕自身，反省するべき立場なのではないかとも思います.

北村さんが触れられたように，英語の文献なら，男性学や男性性研究のアンソロジーというのは，実は既に３巻本，４巻本も含めていくつかあります．僕も関与している男性学・男性性研究の百科事典的なものもあります．結構大きな出版社から複数出されています．そういう意味で，男性学の独立したアンソロジーが日本でもできれば，『新編 日本のフェミニズム』の次の新・新編には男性学は含まれなくなる可能性もあるかなと思います．それはそれでいいのではないかとも思っています.

ただし，男性学のアンソロジーをフェミニズムから離れてつくるとしたら，いろいろ議論を呼ぶかもしれませんけれども，そこには恐らくあるポリティクスが浮上してくると思います．つまり，男性の権利派とか，あるいは反フェミニズムの男性学や男性性研究をど

うやって入れていくかということに直面せざるを得ないということです．僕がやるかどうかはわかりませんけれども，林道義さんを入れるか，小浜逸郎さんを入れるか，小谷野敦さんを入れるか，という問題です．もし僕が編集するならば，批判的なコメントをつけながら入れることになると思います．

最後に，多くの方がおっしゃっていたように，フェミニズムというのはやはり実践にかかわる理論です．男性学や男性性研究も僕はそうだと思っています．それなら，理論はどうやって現実にかかわるのか．今エジプトで民主化運動が燃え上がっていて，僕の心はときどきそっちのほうへ飛んでいってしまいます．今年で60歳になりますので，あまり無茶はできないですけれど．もちろん調査研究や理論の形成というものが社会を変える力になることはあると思います．

次にアンソロジーをつくるなら，制度設計に対してどういう提案ができるのかということもかなり本気で視野に入れる必要がある．また，多くの人に伝わるような書き方も考えていくことも重要です．多分そのときには，活字の未来がどうなっているのかも問題になっていくのかなと思っています．（拍手）

千田　それではトリになりますけれども，４巻『権力と労働』の解説を書かれた大沢真理さん，お願いします．

大沢真理――第４巻『権力と労働』

皆さん，こんにちは．遅れて参りました大沢です．千田さんからメンションはなかったのですが，私が担当させていただいた第４巻は，旧版と同じタイトルを持ちながら，その編者が違うほぼ唯一の巻です．『男性学』も，旧版では上野さんが別巻として編者をされたのを，今回は伊藤公雄さんがなさったという，似た事情がある．でも男性学が継子かゲットーだとすれば，ど真ん中の『権力と労働』という巻を旧版とは違う編者が担当するというのは，予想を超えた大変さがありました．旧版はそれとして大変凝集性の高い巻だったのと同時に，天野正子さんによる大変見事な解説がありまして，一体この上に何を上書きしようというのかと困ったわけです．

権力と労働をめぐる現実の状況には，旧版から新編への15年の間で，残念ながらさほど進歩がない．いくつかの立法はあったけれども，男女賃金格差をとっても，女性労働者の非正規の比率の伸びということを考えても，状況は改善したのか，むしろ改悪ではないかという中で，研究は非常に地道なものも含めて進んできましたし，実践面での取り組みもありました．旧版に収録されていたもののうち，教育の巻に移ったもの，従軍慰安婦の問題でグローバリゼーションの巻に移ったものを除いて全部をそのまま収めながら，なおかつ若干の増補ページ数の中に15年間の成果を入れ込むという，アクロバットと言いたい作業をいたしました．

ページ数との闘いの中で，日本の労働のジェンダーアプローチを考えたときに，外国人

の研究者，あるいは活動に携わる方，それから男性の研究や発言の非常にすぐれたもの，見落としてはならないものを入れられなかったことについては，今でも残念に思っています．けれども，何につけ独断と偏見はつきもので，まるっきり公正なものなどありませんから，あえてそういうものを入れないというスタンスのアンソロジーの，偏見やねじれぶりを楽しんでいただければいいのではないかと開き直っています．

それから，計算していませんけれども，執筆者の平均年齢は多分上がりました．増補版の方々のお名前を見てください．お若い方もいらっしゃいますけれども，この会場にいらっしゃる方よりももう少し年配の方が，この巻では「お若い方」の範疇に入ってしまいます．浅倉むつ子さん，森ます美さんにしても大家ですし，堂本暁子さんは議員立法であったＤＶ法の成立に大変貢献をされました．千葉県知事を２期務められ，押しも押されぬ大家です．けれども，その取り組みは非常に若々しい．

「若々しい」が褒め言葉になってしまうのはよくないのかもしれませんが，例えば男女雇用平等法の研究を非常に長年月こつこつとやってこられた浅倉さんが，労働法の女性中心アプローチを言い出そうと踏み切ったのは 2000 年になってからです．そういう想いは彼女の胸の中でずっと燃えていたのかもしれないけれども，打ち出したのは 2000 年からだった．私は彼女が労働法体系を変えたと思っています．その潜在的影響力は甚大なものです．

また，堂本さんのＤＶ法の取り組みにしても，彼女が国会議員になって，連立与党の議員団座長という権力の中枢にかなり近いところに女性として入っていき，官僚の常識，法制局の常識を乗り越えてこのような法律をつくることが，いかにスリリングな冒険であったかが伝わるように，１冊の本から抜き出すのは苦労しました．

労働や社会政策の研究にかんしては，４巻の解説では，家父長制という言葉を用いませんでした．旧版には私の著書が抄録されていて，家父長制という概念を天野さんに評価していただいたんですけれども，それ以降使わなくなった．そのことをどう書くか，一つの決断がありました．女性学の労働論や女性労働問題研究から，労働や社会政策の主流の研究対象のジェンダー研究へと進んできた．ですが，果たして家父長制という概念を手放してよかったのかどうかは，問われ続けることだと思います．

最後に，若いフェミニストが生まれてきている点に関して，私は全く心配していません．お手元の中にチラシがあると思いますけれども，岩波書店から『ジェンダー社会科学の可能性』（全４巻）を出させていただくことになりました．この会場にも執筆者がたくさんいらっしゃって，まだ原稿が出ていない人もいる．執筆をどうぞよろしくお願いします．（笑）いま編者として，続々と集まってきている比較的若手の方の原稿を読ませていただくと，私自身が目からうろこが落ちる．やっぱりジェンダー研究というのはすごく深まり進化していると日々実感しておりますので，全く心配していません．

今日遅刻してきた大沢は，伊藤るりさん以上に遅れてきたフェミニストです．何しろ私は 34 歳では，フェミニズムなんてやっている女は，ばかか怠け者だと思っていました．それが本当に目からうろこが落ちたというか，頭がすげかわったぐらいに，あるとき突然フ

ェミニストになりまして，これからもそういうことはいろんな女性の上に起こっていくに違いない．男性の上にも起こるだろうということを申し上げて終わります．（拍手）

千田　ありがとうございました．私は，大沢さんが目覚めて，駒場でゼミを持ったときにちょうどゼミに参加していました．それが私のフェミニズムへの回心……．

大沢　それが回心してすぐの頃なのかな．

千田　そうです．信じられないぐらい熱い授業で，「ヨガをすると背骨のゆがみがわかるように，社会のゆがみがわかったの」とか（笑），今の大沢さんからは信じられないような，神がかったかのような熱い言葉をたくさん聞いて，私も熱気に引き込まれたのを思い出します．

これから休憩を 15 分とります．私の時計が今 40 分なので 55 分まで休憩をとって，その後また討論に入らせていただきたいと思います．

（休憩）

●討論

十時　それでは引き続き，討論の時間を持ちたいと思います．千田さん，お願いします．

千田　コメントペーパーを配ったらどうかなどいろいろ考えたのですが，「こういうものはガチンコ勝負のほうがおもしろい」と編者から言われました．「どんなふうにやっても司会者は憎まれ役になるので，しようがないわよね」とも言われて，本当に困ったなと思っています．

発言なさるときはお名前と，よければ所属もおっしゃってください．発言は，１分をめどによろしくお願いします．

合場　明治学院大学国際学部の合場と申します．コメンテーターの方や編者の方の貴重なご意見，ありがとうございました．15 年後の編集方針にかかわることですけれども，８巻『ジェンダーと教育』では，教育という一つの制度が取り上げられていると理解しました．ジェンダー化されている制度として教育も重要ですけれども，フェミニズムで網羅されていないのが，スポーツという制度だと思います．ゴールデンタイムのニュースで必ずスポーツの枠が設定されていて，そこで男性の身体的優位性が何回も何回も繰り返し映像とともに流れている．なので，15 年後はないかもしれないというお話ですが，スポーツをジェンダー化された制度としてぜひ取り上げていただきたいと思います．

千田　ありがとうございます．ほかにいかがですか．

松崎　慶應義塾大学の松崎と申します．妙木先生がおっしゃっていた，インターネットなど電子メディアの問題で，田中俊之先生という方が『男性学の新展開』という本の中で割とウェブ上のディスコースをたくさん扱っていらっしゃいました．それが，どういうふ

うに扱うとおもしろいのか，また難しいのかというのが気になっています．ですから，電子メディアに関しては伺いたいところだと思いました．

千田　ありがとうございます．要望が続きましたが，それ以外の論点でも何かありましたらお願いします．

岩川　東京大学大学院でトラウマ研究とクィア・スタティーズを勉強しております，岩川大祐と申します．本日は本当にありがとうございます．１分ということですが，短過ぎるのではないかと思うので，もう少しだけ下さい．

フェミニズムというのは「女」を自己規定し，セクシュアリティを自己規定する試みだと思っております．その中で，例えば「便所からの解放」など，すばらしい言葉が生まれました．それを私たちは今，継承する現場に立ち会っていると思っております．そして何よりもこの『新編 日本のフェミニズム』のパンフレットの表紙に書いてあるとおり「生きかたを変える言葉，社会を動かす実践，〈女(わたし)〉からつむぐ思想」．山括弧つきの〈女〉に「わたし」とルビを振っています．これが何よりも，『新編 日本のフェミニズム』の本質を言い表しているのではないかと思います．

先ほど上野さんがおっしゃったように，同盟，連携できる人とはどういう人なのかということに関連して，それを逆照射する形で，齋藤さん，あるいは伊藤公雄さん，それから先ほど天野先生が途中で終わらせたことについてお答え願いたいと思います．先ほどから「男性にフェミニズムは担えない」とか，あるいは男性を党派的に，見事なまでに排除すると言われていました．そこで言われている「男性」とはだれのことなのでしょうか．

つまり先ほど草野さんがおっしゃったように，生まれながらの性別でずっと生きる人，そしてそれを最高のものだと考えている人，あるいはヘテロセクシズム，異性愛が当然だと考えているような男性とは一緒に担えないかもしれない．けれども，ほかの「男性」とは担えるかもしれない．そのような実践は，例えばクィアという言葉のもとで連帯している人々の中で，既に行われていると思います．そのような「男性」との連帯について，齋藤さん，伊藤さん，そして天野先生，お答えください．よろしくお願いします．（注：一分間の鐘が鳴って，言いつくせなかったが，「男性」もフェミニズムを担えるかという問いではなかったことをつけ加え，訂正しておきたい．フェミニズムを担う「女性」とは誰のことをいうのか．とりわけ，性別二元論を揺るがすトランスジェンダーのフェミニストとして，わたしは，『新編日本のフェミニズム』の論者と「同盟」できるだろうかというのが問いの主旨だった．男性用の便所で化粧をする苦々しい時間を過ごしながら，性別を越境する経験の中で，田中美津さんの「便所からの解放」という言葉を「盗用」してつぶやくこと．そして，そのトランジッションの過程で，生きづらさや喜びについて言葉を探し，「トランスジェンダーフェミニスト」としての闘いを闘うこと．それはまさに，生まれ落ちて，一旦は，「男性」として呼びかけられたわたしが，トランスする過程において，「女性」としての経験を行い，他者との「新しい関係性」を求めて呼びかけながら，〈女(わたし)〉を生きようとする試みであるといえる．では，何故，そのような声がこのシンポジウムで響

くのか．それは，フェミニズムとは，「男性中心的な「セクシュアリティの近代」の中で定義されてきた女性の経験を自己定義しなおす試み」（上野千鶴子 2009「「セクシュアリティの近代」を超えて付　増補編解説「異性愛秩序」をゆるがす」上野千鶴子編『新編日本のフェミニズム６　セクシュアリティ』岩波書店,24）であるからだ．「〈女(わたし)〉からつむぐ思想」とは，性別二元論の中で生きづらさを感じる人々によって担われ，生き延びるために，「女性の経験」を再定義してゆく実践にほかならない）．

千田　ありがとうございます．ある程度共通する質問を集めて，編者には後でまとめてお答えいただければと思います．今の質問は要約すると，〈女(わたし)〉というアイデンティティがあるとしたら，男性の中にも多様性を見るべきであるし，〈わたし〉を担える人がいるのではないか，結局はだれが当事者なのかという問いがある，ということになるかと思います．突き詰めれば当事者自体も解消していくという考えがポスト構造主義的なクィア・スタディーズの中から生まれてきていて，実際にクィアというものは，それを実践しているのではないかという発言だと理解しました．

日本のフェミニズムの担い手をめぐって，他の方々も論点を出されていましたが，他の論点についても質問があれば，まとめて受けたいと思います．

中西　日本大学の中西と申します．よろしくお願いします．すごく緊張します．先ほどスポーツの話が少し出ましたが，僕はあるスポーツで，先日ニューヨークで行われた世界大会に出場してきました．ダブルダッチという縄跳びを使ったスポーツで，今年は準優勝に終わりましたが，来年も出場する予定です．そのスポーツでは，メンバーの中に必ず女性が入っていないといけないんですね．新しいスポーツはそうやって男女が共同で行うものがすごく多い．そういうものがふえてきていますので，スポーツの男女共同参画というか，参加の仕方の理想について少しお聞かせ願いたいと思っております．

千田　ありがとうございます．先ほどのスポーツと絡めて後ほど議論できればと思います．先ほどの質問で「便所からの解放」への言及がありましたが，会場を見たらおにぎり食べていらっしゃる方がいて，よく見たら田中美津さんではありませんか．発言をいただければと思います．

田中　便所とおにぎりの田中です．（笑）急に言われても何を言っていいかわかりませんが，昔母が生まれて初めて北海道に旅行しようとするときに，全日空とか日航とか続けて落ちてしまって，さぁ明日行く日という時になって，母は私を相手に「私が死んだらこの家はどうなるのだろう」とか，ぐちゃぐちゃ１時間以上愚痴るわけです．もう嫌になったなと思ったら突然，「おまえ，あした北海道に行かない？」と言われて……．母はすごく愛情深い女だった，でも子どもより自分が大事ということを正直に見せてしまう人でもあって．

私が一番大事だ，それで「何悪かろう」．と，これは田辺聖子さんの旦那，「カモカのおっちゃん」の言葉です．私は今までこの母譲りの「何悪かろう精神」だけで生きてきたような気がします．自分以外の何者にもなりたくなかったから．年齢を聞かれて１歳年をごまかしても，何悪かろう．リブの旗を掲げたぐらいですぐに年齢なんか気にしない，毅然

とした女になれたとしたら，またまた私は「どこにもいない女」になってしまう．毅然と生きたくてリブになって，でも１歳年をごまかして若く見られたいと思う私がいて，何悪かろう．その両方で私だ，と．

昨日私はサッカーを見て，夜更かしして，それで遅れて来たんですけど，ミーハーな私にとって，サッカーと今日のシンポジウムは両方とも大事，ふたつは横一列に並んでいます．サッカーでは，フォワードは「人間」じゃダメなのね．半分は「けだもの」でなくちゃ．そうでなければシュートがうまくできない．シュートしてナンボだ．でも日本のフォワードは「けだもの性」が足りなくて，小ぎれいなパス回しばかりやってて，イライラしてくる．ま，昨日は最後に決めてくれたからいいけど．

今，フェミニズムはだんだん，何だかんだ言って元気なくなってきてると思います．もちろん国際婦人年以降，行政はフェミニズムを無視できなくなっているし，いろいろないい改革もいっぱいあるけれども，言葉をはしょって言えば，フェミニズムは「人間」になり過ぎてしまったかも．リブの「けだもの性」，何悪かろうという自分の心の叫びでリブの女たちは壁にぶち当っていったということを，このフェミニズムの本を読んでくださる中で，改めてとらえ返していただければ……と，今でもまだ半分「けだもの」の私は思います（拍手）

千田　突然指名しましてすみませんでした．フェミニズムの担い手に関して，ほかに質問はありませんか．

大田　大阪から来た会社員の大田季子といいます．今は休眠状態ですけれども，婚外子差別と闘う会というものを昔やっていました．アンソロジーに善積京子さんの本も抄録されているので，ありがたいです．

先ほど，履歴書に専攻や卒論のテーマがジェンダー研究だと書くとだめという話があったのですが，そういうことは実際によくあるのでしょうか．もしそれが本当だとすると，担い手が育っていくのは，あまりに絶望的ではなかろうかと思います．

また，嫌フェミというか，フェミが怖いという地点から，いや，私はそちらに行く，となる原動力はそれぞれ皆さんあると思いますが，その気持ちよさを伝えていきたいと思いました．

千田　ありがとうございました．フェミの嫌われ方ということなら，北原みのりさんに行くのがよいのではないかと思いますが，北原さん，いかがですか．

北原　北原みのりです．東大はすごく寒いですね．こんなところで皆さん勉強していて，大変だなと思っていました．私の名前が出てきて驚きました．私の『フェミの嫌われ方』もこのアンソロジーに入れていただいていますが，2000 年に書いた本なので，自分でも大分忘れているところがあります．私は去年 40 歳になりましたけれども，今の 20 代の人たちと 30 代の人たちのように，フェミの嫌われているところでしか生きてこなかった世代の人たちと，フェミの先頭を走っていた人たちがここで出会っている．会場が豪華だなと，そちらに気がとられていたところでした．

先ほど，フェミが嫌われている中で，素直にフェミであることを自認されたという発言がありました．私は，フェミが嫌われているから，だから自分はこんなに生きにくいのだなと気づいて，フェミであることと女であることが，自分の中ではまだ課題なのだと思い続けていることを今日確認しました．すみません，寒くて震えながらでした．

千田　ありがとうございました．編者の方たちも豪華ですが，実は会場にいらっしゃる方がすごく豪華なので，「資源を有効活用しろ」という指令がきています．私などからするとすごく大先輩というか――にわかに緊張してきました――本でしか読んだことがないのですけれども，水田珠枝さん，ご発言をお願いいたします．

水田　突然ご指名にあずかりましたが，何を言えばいいのでしょうか．

千田　手際が悪くて申し訳ありません．若い世代から，アンソロジーの編集方針や，フェミニズムの担い手は女だけなのかということについていろいろな指摘が出ています．水田さんの編者へのリプライでも，そうした指摘について考えられたことでもどちらでもかまいませんので，コメントをいただければと思います．

水田　私は 81 歳になりました．この席上で一番年上ではないかと思っています．今まで西欧のフェミニズムをやってきましたけれども，最近では，日本のことをやってみようという気持ちになってきました．それは，過去の日本のフェミニズムをもっときちんと読んで整理しないと，継承し発展させることができないと考えたからです．アンソロジーを組むには何らかの限定が必要ですが，この旧版も新版も，70 年代以降のことだけを取り上げているように見えます．この会では 15 年後の再新版が話題になっておりますが，15 年先の未来を展望するには，15 年前の，またもっと以前の思想の継承と断絶を，検証する必要があると思います．

明治，大正時代に女性たちが語ったことを読んでみると，70 年代に新しい課題として受けとめたことのいくつかは，すでに過去に提起されております．フェミニズムは同じことを繰り返し語ってきたのではないか，という感じさえします．私はあと何年生きるかわかりませんけれども，死ぬまでゆっくりと時間をかけて，日本のフェミニズムはこういうものを継承するのだということを，私なりにやってみたいと思っております．（拍手）

千田　ありがとうございます．私も水田さんの著作を通してウルストンクラフトを読んだり，ルソーを知ったりしましたので，とても感慨深いです．ところで，日本のフェミニズムに対して，ご専門がドイツの姫岡とし子さんはどう考えられますか．

姫岡　私は去年の秋にドイツに行って，図書館で 20 世紀初めの，主に右翼系の新聞を読んでいましたが，びっくりしたことに，日本のフェミニズムに関する報道がたくさんありました．高群逸枝はまだでしたけれども，与謝野晶子とか，「新しい女」とか，ともかくいろいろなことが，しかも右翼系の新聞に出ていて，本当に驚きました．日露戦争で日本が勝利したことで注目され始めたのかもしれません．

でも今は，そのころほどには注目されていないと思います．関心を持ったとしても，どうしても日本語が読める人に限定されてしまいます．先ほど英語での発信が課題として指

摘されていましたが，日本のフェミニズムがいろいろな世界に知ってもらえればいいなと思います．

また，やはりそのころからバックラッシュが盛んで，その意味でフェミニズムに注目していたのだと思います．注目していたからこそ，それだけの報道をしたのでしょう．結構，敵は学んでいる．日本のフェミニズムは，味方が継承しているだけではなく，敵も学んでいるということを申し上げておきます．（拍手）

千田　そちらの手を挙げていらっしゃる方，お願いします．

藤木　日本女子大学などで非常勤講師をしている藤木と申します．専門は日本近代文学，特に明治の女性文学で，雑誌『青鞜』に寄稿した女性作家などを研究しております．今の姫岡先生のご発言を非常に興味深く拝聴しました．20 世紀初頭というと，いわゆる第一波フェミニズムである世界規模での婦人参政権運動が，諸外国に派遣された特派員によって日本でも盛んに新聞報道されていました．つまり，日本の，当時高等女学校程度の識字能力がある女性たちは，リアルタイムに世界のフェミニズム運動を知ることができていました．これは常識に属す範疇であるとして，20 世紀初頭のドイツの右翼系新聞に日本のフェミニズムが盛んに紹介されていたという事実は初耳です．その内容や報道のあり方が非常に気になりますので，ぜひ詳しく具体的に教えていただければと思います．

千田　では，終わったらぜひ姫岡さんにお聞きになってください．

池川　実践女子大ほかで非常勤講師をしている，池川と申します．今の藤木さんのご指摘は，フェミニズムとナショナリズムの交差点を考える上で，この会場で共有すべき大きな問題ではないかと思いました．なぜかというと，その当時，右翼は本当にフェミニズムの敵だったのだろうかということがあるからです．第一次世界大戦の経験を見てもわかるように，近代国家というのは，女性のフェミニズムを帝国主義その他に大いに利用しました．ドイツもしかり，日本もしかりです．

「日本のフェミニズム」と言うとき，日本のフェミニズムは，世界のほかの国のフェミニズムとどう違うのかという大きな問題が，どうしても立ち上がってくると思います．私の個人の意見でいえば，日本のフェミニズムは敗戦国フェミニズムにほかなりません．総力戦を戦って，負けたからこそ世界に発信していけるアンチ軍事主義，アンチナショナリズムがあり，近隣諸国との連帯という立ち位置が出てくるのではないかと思います．

その意味で私は，全 12 巻の中に『女性史・ジェンダー史』が入って，しかもそれが近代という時代をカバーしたことの意味はとても大きいと思います．私はこの全 12 巻が，次の私たちの世代が受けとめていくべきものだと思っています．（拍手）

千田　ありがとうございます．日本という場所の両義性，つまり，敗戦国でありながら第一世界に属しているという，日本が占めているアンビバレントな位置について，指摘されたと思います．伊藤るりさんも，全巻を通じてグローバリゼーションの問題，ナショナリズムの問題が出てきているとおっしゃっていましたけれども，本当にそのとおりだと思います．こうした点も含めて，後でまとめてコメントしていただければありがたいと思い

ます.

ほかに，いかがですか.

今井　日本女性学会の今井と申します．先ほど，男性がフェミニズムの担い手となり得るかという問いかけがありましたけれども，まずこの質問自体きちんと答える価値があるかどうか，私は疑問に思います．つまり，担える場合もあるし，担えない場合もある．ですから，議論がもし相手への敬意に基づいて成立するとすれば，同じ人物であっても担える場合もあれば，担えない場合もある.

そういうふうに考えていきますと，男性は担えるかという質問については，カテゴリー内の多様性を隠した形で議論してもかみ合わない部分があると思います．いま何が必要かといえば，言葉に対する敏感さだと思います．今のような乱暴な質問をしても，あまり生産的な議論にはならないのではないでしょうか．二元論的な言葉の性質に敏感になっていかなければ，同世代の間でも世代間でも，フェミニズムの成果は継承できないのではないかと思っております.

千田　今のご質問は，フェミニズムを男性が担えるか担えないかという問題についてでしたけれども，裏を返せば，メンズリブや男性学がフェミニズムを担いたいか担いたくないかという問題もあると思うんですね．両者の緊張関係の中で生じている問題だと思うので，後で伊藤公雄さんにリプライしていただきたいと思います.

桑原　NPO 法人かながわ女性会議で市民運動をしている桑原といいます．私は 60 年安保世代で，女性問題にずっとかかわってきて，思想的な変遷もみてきています．男性についていうと，メンズリブは大いにやっていただかないといけないし，大いにやってもらいたい．フェミニズムとの関係を抜きにしても，男性はどんどん自己解放を進めてもらいたいと思っています.

それから，フェミニズムについては，感動したり，新たな発見があったり，というところが一番大事だと思います．全 12 巻のアンソロジーを読み直しても，直感的にそう思います．ですから，今日のシンポジウムを聞いていてものすごく物足りないなと思うところがあります．歴史的な遺産だと豪語するのは，確かによくわかります．井上さんの話も上野さんの話も，同時代を生きた人間として，とてもよく分析されていたと思います．その中で，何か物足りないなと思うのは，圧倒的多数の庶民が登場しないということです．市民運動では主婦層というか，このごろは大体キャリアをもっている女性も多いわけですけれども，その人たちがフェミニズムに疎い．無関心，無気力になっている，そういうところに全然触れていません.

少し話が飛びますが，このシリーズの中では私は，１巻の富岡多恵子さんの「母親からの解放」がやはり一番大事ではないかなと思います．性別役割は全然変わっていない．アンソロジー全体をいろいろな視点から分析し，いろいろな担い手と連携して読んでください，というのはそのとおりです．でも，核心は性別役割にあります.「母親からの解放」ということを，女も男も徹底的に考えて自己変革していかないと，物足りないこの状況を突

破できないのではないかと思います．その点を特に強調したいと思います．（拍手）

千田　ありがとうございました．庶民層にフェミニズムが浸透していないということから，性別役割の問題が出てきました．指名されそうな人は，身構えていてください．

先ほど加納さんが，ジェンダーの相対化はすべてジェンダー史に始まって終わるのではないか，そこまで強くは言っておられなかったかもしれませんけれども，ジェンダーを歴史化することが重要だとおっしゃいました．女性史は女性の民衆を対象にしてきたわけですが，これに関して歴史社会学をやっていらっしゃる牟田和恵さん，何かお考えはありますか．

牟田　直接には答えられませんけれども……．旧版の３巻に入れていただいていた私の「戦略としての女」は，1992 年，まだ若手研究者だったときに書いたものです．今度の新版には，１巻に，男女共同参画社会基本法制定後の状況を分析したものを入れていただきました．この２本と自分自身のことを考えてみますと，江原さんや上野さんもそうだったと思いますけれども，大学院で社会学をやっていた頃，ジェンダー関係のことは陰で，副業でやらなければなりませんでした．例えば，上野さんも構造主義の研究が本職で，江原さんは現象論的社会学を研究していて，フェミニズムは，いわば裏稼業でこっそりやっていた．私の世代までそうでした．

それが今日，男女共同参画社会基本法をつくるエンジンとなられた大沢さんもここにおられ，また，正面からフェミ研究，あるいはクィア・スタディーズをやっておられる若手がたくさんいらっしゃっている．そのことにすごく感動しています．

その意味で，このアンソロジーが編まれたこと，それ自体がすごくすばらしい業績であるだけでなくて，こうやって出会いの場，集いの場，人々が交流する場をつくっていただいたことも含めて，編者の方，それから十時さんに感謝したいと思います．

千田　きれいにまとめていただいて，どうもありがとうございます．牟田さんより少し上の世代で，やはりほかの専門を持たれていたという意味で，金井淑子さん，どう思われますか．

金井　金井と申します．困ったな．もし 15 年後，ないしは 10 年後にもしフェミニズムという言葉を使って新しいアンソロジーをつくるとしたら，フェミニズムの第３ステージを明確に意識することが必要なのではないでしょうか．そのときには，これは多分反発されると思いますが，性と性役割とか，教育とかという軸ではもうなくて，トランスナショナリズムとフェミニズムとか，グローバル化とフェミニズムとか，女性政策とフェミニズムとか，クィア・セクシャル・マイノリティーズとフェミニズムとか，そういう区分けで，いわゆるフェミニズムというものが主語に立った，全面的な改訂がなされるべきではないかと思います．

それから私は，いま牟田さんがおっしゃったのと同感です．この場に来て，こういう出会いがあった．日本において，リブでできた一つのうねりが，フェミニズムでつながっていかないだろうかとちょっと思い浮かべて目をつぶっていたときに指されてしまいました．

そういう意味で，感動しております．

千田　ありがとうございます．リブをフェミニズムで継承して，その後，フェミニズムの第３ステージを踏まえた新しいフェミニズムの新新版的アンソロジーを編んでほしいというエンカレッジとして受け取っていいでしょうか．

新しさということでは，第２部で岡野さんが，2000 年以降，低調というか，新しい理論が出てこないと，江原さんの指摘を引いて発言されていましたが，トランスナショナルな状況の中で，ジェンダー，性役割というキー概念だけではとらえ切れない流動的な動きをつかまえることがとても難しくなっているので，一見停滞しているように見えているのではないでしょうか．けれどもこの停滞を過ぎれば，また新しい流れが出てくると思います．そういう点も含めて，最終的には編者にお返しして，新しい動きの展望も聞いてみたいと思います．

小浜　日本大学の小浜と申します．中国近現代の歴史を勉強しています．牟田さんの分野ではもう隠れてジェンダーをやらなくていいということですけれども，私の分野では残念ながらまだそうではありません．先ほど来，女性史について，加納さんがジェンダーの歴史的構築を明らかにするのが重要だったとおっしゃいました．それは日本史や西洋史の分野では不十分ながらもなされてきて，歴史研究全体の中で女性史の場は指定席のように確保され，そこだけに閉じ込められて歴史研究全体にジェンダーの視点が及んでいないという，女性史・ジェンダー史のゲットー化が現在の問題となっています．ですが，アジア史の分野ではまだゲットー化された指定席すら確保されていません．

しかしながら，私たちの社会の家父長制の構造は中国に淵源を持つとされる儒教的なものを引きずっているにもかかわらず，それがどのように作用してきたかということの解明は，アジア各国の歴史研究の中でも，日本におけるアジア研究の中でも極めて不十分な状況にあります．これはかなり意識して改善していく必要があると思っています．進んでいるところもあるけれども相変わらず変わっていない研究分野もあるので，最近フェミニズムの退潮かなと思われる面が出てきているのではないでしょうか．（拍手）

千田　ありがとうございます．まだまだジェンダーが認められていない分野があるということでしたけれども，少々こじつけのようですが，エスニシティに関連して，小林富久子さん，どうお考えになりますか．

小林　この企画を考えてくださいました岩波書店の方々，それから編者の方々にお礼を申し上げたいと思います．今日のシンポジウムのプログラムを見たときに，私は，これはもう大変なイベントだ，フェミニズムの総決算だ，絶対来なければと思いました．本当にそのような会合になっていて感無量です．

私は長いこと何となく自分は若手だと思い込んでいました．ずっと昔，雑誌『フェミニスト』に一番年下で入っていて，次に日本女性学会を立ち上げたときにも一番若手だったので……．ずっとそれが抜け切らなかったのですが，いつの間にかこうした場で指名される身になっていることを，いま改めて感じました．

新版では，全 12 巻の中に『フェミニズム文学批評』を入れていただきました．金井さんは今後改訂版をつくるのなら，問いの立て方が違うものになるだろうとおっしゃいましたけれども，今回の版で初めて『フェミニズム文学批評』を入れていただいたのは，私としては非常に意義があることだと思います．日本では社会学などでのフェミニズム研究が比較的盛んです．ただ，現在のフェミニズムの発祥地であるアメリカでは，文学がものすごく大きな位置を占めていました．ですから，ここに入れていただいたことに感謝しております．

千田　ありがとうございました．会場の久場嬉子さんと林香里さんにコメントをいただいてから，編者の方に返したいと思います．久場さん，お願いいたします．

久場　久場と申します．時間がありませんので一言だけ．フェミニズムが全然入っていない学問の分野があるということをお話したい．私は経済学にはフェミニズムが入っていないと思います．皆さんご承知のように，経済学は今グローバリズムも含めて，経済社会の基本的な方向に非常に大きな影響を持っている学問分野です．私は経済学の学説，ジェンダーと労働論の研究をしておりますが，ジェンダーと労働論はともかくも，理論，学説となりますとフェミニズムは一切入っていません．

1990 年代にアメリカの経済学会で，「経済学に女性の居場所はあるのか」という問い直しがされて，国際フェミニスト経済学会というものが発足しました．日本でもその学会と連携する活動が始まり，約 6 年になります．とにかく，社会科学の中核といわれる領域で，フェミニズムが一切入らない領域が頑としてあるということを申し上げたいと思います．

千田　最後に林さん，お願いします．

林　東京大学の林香里です．私はメディア，ジャーナリズムの研究をしていて，今回の『表現とメディア』に入れていただきました．15 年後にこういうアンソロジーの出版がどうなるか，やはり考えます．岩波書店さんがアンソロジーをつくってくださったことに，非常に敬意を表しておりますし，今回の編者の方たちのいろいろなご苦労もわかりました．ただ，15 年後の出版となると，やはりこのままではないと思います．ですが，アンソロジーほど電子メディアと親和性があって，うまく使えるものはないのではないでしょうか．そのビジネスモデルがどういうものになるのかは，私には何とも言えませんけれども……．

例えば，6 巻に収録されている「もりもり☆アイアイ」さん．この方について，私は全然知りませんでした．アンソロジーが電子メディアでつくられたら，リンクをクリックすると，この人がどういう人なのかわかるサイトに飛べたりするといいのではないか．あるいは，幾つかの巻で編者の方が重なっていますけれども，これも，各巻ごとだけではなく，有機的に横につながっている証左だと思うんです．また，この文章を読んだ人は，別のここも読んでいるとか，そうしたことが立体的に見えてくるような，電子化すればそういうアンソロジーができていくのではないかと思います．先ほど江原先生が，全部電子化してくださいとおっしゃっていました．私もそう思います．こういうアンソロジーの出版こそ，工夫次第では，電子化，電子書籍の将来に非常に希望を与えるのではないかと思いました．

千田　会場を見ると，荻野美穂さんとか，船橋邦子さんとか，秋山洋子さんとか，酒井はるみさんとか，ぜひお話を聞きたい方がたくさんいらっしゃいますけれども，残りの 20 分で編者の方にリプライしていただかなければなりません．では最後に，手を挙げている方から手短に発言していただいて，編者の方に返したいと思います．

上間　私は上間と申します．所属は東京大学の大学院ということになっていますけれども，私はフェミニズムに対して疎外感を感じている１人です．今までフェミニズムをやってきたというか学んできましたが，何も自分の身になっている気がしなくて，勉強しても勉強しても自分のものにならない，自分の言葉にならない，そういう感覚がありました．

今日のシンポジウムもそうですけれども，すごい先生方が集まっていて，司会の方はそうした先生方に発言を求めてこられましたが，一方で実際には，言葉を出せない方がとてもいっぱいいます．齋藤さんが問題提起した「世代間の問題」のお話があったとき，また例えば，だれがフェミニズムの担い手になっていくかという点についてお話が及んだとき，「若い世代」と名指しをしているにもかかわらず，若い世代からそういう問題提起があったら，「フェミニズムはカテゴリー化を避けてきたのよ」と，うまくするっと抜けるというか，抜けられたような感じがあるように思います．そういう場面に接した今日のこの場においては，そしてこの場に展開されているようなフェミニズムの場においては，私は自分の言葉を獲得できなかったと思っています．

私は「穴あきの会」という公共性とジェンダーの問題に関わり続ける女たちの会の立ち上げに関わりました．先ほど田中さんがおっしゃったこととの関わりで言えば，「けものの声」を取り戻すために，「叫ぶ会」に参加したり，今日もヒョウ柄の服を着たりしています．また，「見た目や服装を偏見や暴力の言い訳にさせない，政治的ミニスカ党」というものを勝手にやったりして，いろいろ実践しています．そこでようやく自分の言葉を獲得できたなという気がしていますけれども，それでもやはり他方で，フェミニズムに対して自分が抱いている疎外感や，またはそこここに存在している疎外感を抱いている人に，向き合っていかなければならない．私自身も向き合わねばと思っていますが，この場でのいろいろな先生方とのつながりに入れない人が山ほどいるということに，この場にいらっしゃるひとりひとりが向き合わなければいけないと思います．（拍手）

●編者からの再リプライ

千田　ありがとうございます．

では，申しわけありません，残り 15 分で編者の方にリプライをお願いしたいと思います．では，上野さんからお願いします．

上野　では，最初に血祭りに上げられましょう（笑）．当事者性についてですが，男にフェミニズムが担えるかという問い自体が乱暴だといえますが，逆に，では女なら誰でもフェミニズムが担えるかと言われれば，そうとは限りません．女のなかにも反フェミニズム

の人はいますし，女を論じている男でも，林道義，小谷野敦，小浜逸郎は反フェミニズムだと思います．ただ，瀬地山角さん，加藤秀一さんなどのテキストをアンソロジーに入れられなかったのは，結果として彼らに対して不当だったことでしょう．そのような，偏狭な政治をやってしまった自覚はあります．

次に，一体どんなメッセージを，だれがだれに届けるのかという質問ですが，どうも最後の方のご発言の限りでは，残念ながら私たちのメッセージはその方には届いていないということがわかりました．多数派の主婦層にも届いていないでしょう．「そもそもこの文体で，だれに届けるつもりなのか」とまで迫られ，届ける気があるのか，届くべき人に届いていないではないかと言われれば，そのとおりかもしれません．

まず届くも届かないも，フェミニズムのメッセージがあるというそのこと自体を記録しておく必要がありました．後から来る読者が，この言葉は私のものになるのかならないのかと検討すべき在庫そのものが，そこにストックとしてアクセス可能な形で存在する必要がありました．種をまかない限り何も育ちません．その結果，歴史としてこういうアンソロジーが生まれました．

歴史に学ぶという水田さんのお言葉を，私は重く受けとめました．歴史といっても本書では 1970 年代以降，第二波フェミニズムのテキストしか採用していません．もっと長い歴史的なスパンの中で考えたときに，日本のフェミニズムをそこで区切ってよいのか，第二波フェミニズムを日本のフェミニズムのなかでどう位置づけるのかという問題があります．また諸外国のフェミニズムと比べて，日本のフェミニズムの固有性とは一体何だったのかを考える必要があります．そのためにも，このような在庫目録をつくる必要がありました．ここにアンソロジーがありますから，検討の材料にしてくださいと提示する必要があったのです．戦前の第一波フェミニズムについてはそれ相応の在庫も研究もありますが，第二波フェミニズムについては，これが最初の歴史化の試みでした．そのことはわかっていただきたいと思います．

先ほど天野さんが運動と研究と，それと女であることの痛みが三位一体になっていた幸せな時代があったとおっしゃいました．それが現実から乖離してきた中で，お勉強フェミというヘタレフェミが生まれたという発言もありました．けれども，フェミニズムの種がどこか間違った畑にまかれても，大化けするかもしれません．そこにまずどんなメッセージがあるのか．フェミニズムの言葉が自分の言葉とかみ合うかかみ合わないかということを検証するためにも，その材料としてこのアンソロジーが存在する意味があると思っております．（拍手）

伊藤公雄　伊藤です．誤解がないように言いますけれども，僕は，瀬地山さんと加藤さんは入れようとしました．いろいろな都合で入りませんでしたが，僕が落としたわけではないということは，一言言っておきたいと思います．勘違いされると困りますので．（笑）

質疑討論のなかで男性の話がいっぱい出てきました．男性とは何か，あるいは男性にフェミズムが担えるのかという問題などなど．僕は，担える人もいるだろうと思います．僕

はフェミニストではないと繰り返し申し上げました．ただ，僕もフェミニズムの一部としていろいろな運動を担っているのは，それもまた事実だろうと思っています．

基本的に僕はカテゴリー化が苦手な社会学者です．自分の概念をつくるとカッコいいんだけれども，できるだけ自分の概念をつくらないようにしよう，という縛りをかけています．男性とはだれかという問題もそうで，男性というカテゴリーもまた，常に歴史の中で生成，変成しているし，今だって変わっている．セクシュアリティだって変わり得るわけです．いつも可変性に開かれている地点で考えていくのがぼくなりの一つのスタンスかなと，個人的には思っています．答えになるかどうかわかりませんが……．

一つだけ言いおきたいのですが，スターフェミニズムの仕組みはもうそろそろはやめましょうよ．僕はスターではないかもしれないけれども．せっかく会場にこんなにたくさんの人がいるのに，スターだけが発言するのはよくないと思う．できるだけたくさんの人が発言できたほうが，よかったのではないか．そういう仕組みを作らないと多くの人に伝わらないということを，一言最後につけ加えておきたいと思います．

江原　私たちは，いろいろな悩みを抱えながら学問の言葉を紡いでいます．その中で，学問の言葉では心に届かないというご意見もたくさんあるのですが，他方，学問の言葉で闘わないと勝ち取れないことも山ほどある．その両方を，いかにうまくバランスをとりながらやっていくかを考えながら，私個人は生きています．そういう意味で，理論編なんて読めないとか，難しいとか言われたこともありましたけれども，この言葉で闘わないと勝ち取れないものがあるということも，わかっていただきたいと思います．（拍手）

天野　私への質問が３点ありました．１点目は，15 年後にアンソロジーを編むとしたら，ジェンダー化された制度としてのスポーツは不可欠だということ．そして，新しいスポーツ種目では男女共同参加だという情報を下さいました．そのために重要なのは，スポーツの基底にある体力観に隠された男性中心性を，自己表現やコミュニケーションの楽しさという多様な価値を伝える体力観に変えていくことなのですね．その点については，今日のシンポにご出席の飯田貴子さんが検証されています．「より速く，より高く，より強く」という筋力優位の体力観そのものを問い直す．それが今後，重要な視点になると思います．

２点目については，金井さんが将来的には教育とジェンダーとか，〇〇とジェンダーというとらえ方ではアンソロジーは編めないだろうと指摘されました．私もそう感じております．たとえば教育の問題というのは，教育への入り口として家族の問題，出口として労働市場の問題があり，複数の社会領域に越境していますね．特に 21 世紀に入ってからの格差社会における「ジェンダーと教育」研究は，この三つの領域を視野に入れながら，ジェンダー不平等，ジェンダー格差をきちんととらえていく必要があります．

３点目の「男」「女」というカテゴリーの問題をめぐっては，私には簡単には答えられそうにありません．「男」「女」のカテゴリーをこえて，いったい「だれの声や経験」を重視し，ていねいに汲みあげていくかが不可欠な視点になると思います．（ベルの音）十分考えさせて下さい，ということで，以上２点で終わります．（笑）

千田　天野さんは毎回毎回言い残しがあるみたいで，申し訳ありません．

井上　もう正直言ってあまり言うことはありませんけれども，当事者性の問題についてお話したいと思います．15 年間にジェンダー研究，あるいは男性の運動や，さまざまなセクシャル・マイノリティーズの人たちの運動が盛んになってくる中で，ジェンダーにかかわる運動の幅，また研究の幅がすごく広がったことは確かだし，それはすごくよいことだと思っています．むしろそういう運動が1970年代のウーマン・リブを思い出させるような，何かすごく輝かしいというか，まぶしい思いを持って見ています．

要するに，運動と研究とが一体化して社会変革につながっていく姿が見えるのですが，逆に，フェミニズムとか女性学は，残念ながら元気がなくなっているように思います．女性とはだれなのか，女性の中の多様性を考えていかなくてはいけないということも確かですけれども，それを考えるあまり，女性である自分という問題，女性としてのアイデンティティを持っていることによって，あるいは外から女性だと見られることによって直面するいろいろな問題が起きている現実について，一緒に考える機会があまりにも少なくなってきた．女性の中の多様性，女性の中の格差に目が向くこと，それ自体は大事ですけれども，同時にやはり女性としての当事者性をもう一度回復していく必要があるのではないかと思っています．（拍手）

大沢　学問は大学などというシステムを持っているのですから，やはり大きな宮殿であり，壮麗な庭がついているわけです．そうであるとすれば，ジェンダー研究やフェミニズムは，その中に小さな離れを１軒建てていいよ，あずまやぐらいは建てていいよと言われているのが現状です．ですが，宮殿の一番大きな母屋の土台から建てかえなければ世の中はよくならないし，庭のつくりも違ってくるでしょうということで，大学という場を変えていくこと自体が闘いです．

それが同時にフェミニズムの制度化をもたらしていて，その得失，得るものと失うものの両面を考えつつ，やはりこの場にいる人の多くは，学問の場で闘わなければいけないのかなと思います．大学で禄を食みながら，学問以外の場で元気よくやって，大学の中では縮こまって，離れにいさせてねというのは，許されないのかなというのが私の考え方です．（拍手）

伊藤るり　今日この中に，実は沖縄からわざわざ来てくださっている方々もいて，もしかしたらもっと遠いところから来ている人もいるのかもしれませんが，本当はそうした方々にも話していただける機会があったらよかったなと思います．私の巻には，在日の立場とか，移住女性の立場の人とか，そうした人たちのテキストを収めていますけれども，そうした人たちが今日のようなフェミニズムを語る場に出てきて，それぞれの立場性を主張できるような社会になるといいなと考えております．（拍手）

加納　１人だけア行からの外れ者，加納です．私は今日，女性史を否定するようなことを言いましたので，それに対する批判が出ると身構えていましたが，なかったのでそれはパスをさせていただきます．

学問の言葉では届かないという声があり，それに対して江原さんがそれでなければ闘えないこともあるとおっしゃった．まさにそのとおりだろうと思います．ただ，ジェンダー論やフェミニズムというものは，ほかの学問の言葉とはやはり違う．その違いは何かというと，当事者性にあくまでこだわる点にあると私は思っています．では当事者とはだれなのか．非常に大ざっぱに言うと，ジェンダー秩序とか性別二元体制の抑圧を自分の問題として受けとめ，そこからの解放を願う人ということです．ジェンダー史であれば，男性が構築された男性性の抑圧を感じるのであれば当然男性も担い手になるし，それから日本近代を考える上で，やはり植民地近代という枠，少なくとも東アジアの枠で当事者性を考えなければいけないと思います．そこには抑圧も加害もあり，このことを考えていきたい．

最後にもう一つだけ．今後は電子メディアに，という声が圧倒的ですが，私はじつは，より速く，より便利になっていくことで失われるものはあると思っています．歴史学の古い人間としては，ざらっとした紙の手ざわり，そこにある手間ひま，不便さというものを，そう簡単に失ってはいけないと思っています．（拍手）

千田　いま会場で手を挙げている方，どうしても一言ということですね．お願いします．

内藤　愛知県から参りました，現在 NPO 法人をやっている内藤といいます．先生方から，フェミニズムはだれに届いているのか，種はまかれたのかというご発言がありましたけれども，実は届いております．私はその第一の要因は，長寿化によって女性の生き方が変わってきたことだと，現場で思います．地域の女性センターなどで活躍している方たちのお話を聞いていただければ，おわかりいただけると思います．私は NPO 法人で「将来の不安解消講座」と銘打ちまして，高齢女性――介護保険を使っていない高齢者が 80％もいるわけですけれども――のグループ活動をやっております．いまの生き方も将来の生き方も，そして死に方も自分で決められるというのがサブテーマです．そこにはフェミニズムという言葉はありませんけれども，こういった学問は地域で生かされているという発言をしたかったわけです．（拍手）

千田　ありがとうございました．エンカレッジしてくださる発言だったと思います．

皆様から広く意見をいただきたいと思いながら，知らない方がたくさんいらっしゃる中で，限られた時間内にどう議論の道筋をつけていけばいいのかと，せめぎ合いの中で，進行に不手際がありましたことをおわび申し上げます．

ですが物事には必ず両義性があると私は思っています．第二波フェミニズムのこのアンソロジーにおいて，リブから継承するものがもちろんあって，私などはそれがすごく胸に迫ってくる世代ですけれども，それと同時に金井さんがおっしゃったように，もう新しいフェーズに来ている．皆さんもおっしゃっていましたけれども，グローバリゼーション，新自由主義の中で，さまざまな新しいフェーズが出てきています．それらをどうとらえるのか，継承しつつ新しいものにどう移行していくのかということは，実に難しいと思います．現象をとらえるのはもちろんのこと，理論的にもすごく難しいことだと思います．

私自身は，これは悪いことではないと思っています．大体，答えがすぐ出る問いは悪い

問いです.「女性差別はいいか悪いか」と問われて「悪い」と答えるような，そういう話をしていても仕方がない．答えが見えないというか，表面を見るとこうだけれども，裏面を見ればこうだという問いが，実はよい問いなのではないかと思います.

担い手に関しても，当事者というものを突き詰めていくと恐らく拡散していく．上野さんも，林真理子とはフェミニストとして共闘できないという話をしていましたね．そうすると，女というカテゴリーを共有しているからといって当事者であるとはもちろん限らない．ではどうすればいいのかといったときに，その人その人の問題意識を尊重しつつ，緩やかに連帯していくしかない．その連帯のあり方も変わっていく．自分の眼差しと他人眼差しが異なるということももちろん生じ得るわけで，そうした中でやっていくしかないと思います.

私たちはいま東京大学でこのシンポジウムをやっています．それ自体象徴的なことなのですが，学問知というものは役に立つのかという問いに常にさらされていくわけです．私はやはり頭でっかちな人間なのかもしれませんが，学問でしか解けない問いはあるとは思っていて――学問でしか解けないという言い方をすると間違いですけれども，日常のわかりにくさを解釈していく枠組みの一つとして学問が有効である瞬間は確実にあります．それはやはり継承する必要があると思っています.

つたない司会で本当に申しわけありませんでしたけれども，今日はどうもありがとうございました.（拍手）

それでは，司会を総合司会に返させていただきたいと思います.

十時　ありがとうございました．皆様ご協力，本当にありがとうございました．時間を若干オーバーしていますけれども，大事なお知らせを三つさせてください．渋谷知美さん，牟田和恵さん，それから岩波書店の藤田紀子さん，いらしていただけますか．まず渋谷さんにかわります.

渋谷　渋谷です，こんにちは．皆さんお手元にこの「拡がる」「届ける」「受け取る」のチラシがあると思います.『新編 日本のフェミニズム』完結を記念し，フェミニズムの世代間継承を目指す共同プロジェクトを，北は札幌から西は高知まで，さまざまなところで開催します．日本のフェミニズムの財産目録をつくろうと，刊行にかかわった関係者，女性政策の最前線で活躍するセンターの担い手や女性グループのメンバー，そして書籍からインターネットへと新たな展開を遂げようとしている活動をつなぎ，「拡がるブックトーク」を開催します．皆さん「拡がるブックトーク」で会いましょう.（拍手）

牟田　ウィメンズ・アクション・ネットワーク(WAN)の牟田です．今日のこのシンポジウムは，WAN が共催させていただいています.『新編 日本のフェミニズム』の刊行が開始されたときからずっと，WAN のサイトで紹介してきました．皆さんたちの中でも，既に見ていだいた方も多いかと思います．今日のシンポジウムの模様も，WAN のサイトでご紹介していきます．今日登壇された方々，原稿をよろしくお願いいたします．ぜひ書いてください.

それからこのシンポジウム全体の模様を文章化したものも，WAN サイトでご紹介していきます．それからいま渋谷さんから紹介がありました，これから各地で開催されるブックトークも逐次ご紹介していきます．

今日，電子メディアに関する話がありましたけれども，WAN サイトを，まさに今の女性たちの思い，活動を電子メディアとしてアーカイブしていく，そういうサイトとして，成長させていきたいと思っております．今はまだまだですけれども，これからずっと充実させていきますので，ぜひ WAN(wan.or.jp）のサイトをよろしくお願いします．ぜひサイトをお訪ねいただくとともに, NPO 法人で支えておりますので, ぜひ会員になっていただき，資金的にもご援助いただくようにお願いいたします．

それから，今日は WAN のグッズも販売しております．これもご購入いただきますと資金的に支えることになりますので，よろしくお願いします．（拍手）

藤田　岩波書店の藤田と申します．『新編 日本のフェミニズム』の後継企画とも言える『ジェンダー社会科学の可能性』のチラシが，今日お手元の資料の中に入っていると思います．第２部の岡野先生のご発言の中で，政治思想史では女性がほとんど出てこないということ，また討論の中で，久場先生から経済学にはフェミニズムが全く欠けているというご指摘があったと思います．ですが，そうした中でも，社会科学諸分野においてそれぞれジェンダー研究の成果が蓄積されてきており，それらの成果を総合すると同時に，社会科学の新たな姿をジェンダーの視点から浮かび上がらせてみたいという，大変意欲的な企画です．

今日ここに来られていませんけれども，憲法学の辻村みよ子さんと大沢真理さんのお２人の編集で，いま鋭意作業を進めております．６月から刊行になりますので，皆さんぜひご購入をよろしくお願いいたします．（拍手）

十時　どうもありがとうございました．もう一つだけ，大事なお知らせです．先ほど質問をしてくださった方々，今日の発言，コメントをみんな文章化して，ウェブサイトですとかでみんなが読めるようにしたいと思います．いろいろ確認が必要ですので，ご発言の方はぜひお名前とご所属，それからご連絡先を，受付でお帰りの際改めてもう一度，ぜひご記帳をお願いいたします．ご協力をお願いします．

それでは，一番最後の締めを江原先生にお願いしたいと思います．よろしくお願いいたします．（拍手）

江原　皆さん，長時間にわたりましてありがとうございました．これだけの多くの方々が熱意を持って議論してくださり，大変感激しております．ただ何というか，今の私の気持ちとしては，一方でこれだけ集まってこういうものができたという誇りと，もう一方でこれだけかという何とも言えない寂しさと，両方があります．私のところのゼミ生が，「先生，すごいメンバーですね．ここにこれだけ集まって，もし爆弾テロがあればみんな死んじゃうね．日本のフェミニズムは終わりだ」と．今のは，非常にひどい冗談ですが，結構事実ですね．ここが，大変悲しい．

日本の現状は，大沢先生のお話にもありましたけれども，非常にまずい方向に行っています．やらなければいけないことは山ほどある．確かに私たちは，一方でこれだけのものをつくることができた．今日集うことができた．アンソロジーが 12 巻ある．未来はある．そうなんですが，他方で，もっと多くの人々と一緒に未来を作らなければならないのにそうできてない，それが悲しい．だからこそ，そういう未来をつくっていきたいと思います．今日をきっかけに，次の活動に続けていければと思います．これをもちまして閉会のあいさつとさせていただきます．

最後にご参加の皆様，また事務局，ボランティアでいろいろ支えてくださった方々，また共催の東京大学ジェンダーコロキアムの皆様，NPO 法人ウィメンズ・アクション・ネットワークの皆様，後援としての東北大学グローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」の皆様，東京大学社会科学研究所連携拠点の皆様，岩波書店の皆様，心から御礼申し上げます．どうも本当にありがとうございました．

十時　これをもちまして解散です．皆様，ありがとうございました．お忘れ物のないよう，お気をつけてお帰りください．（拍手）

（終了）